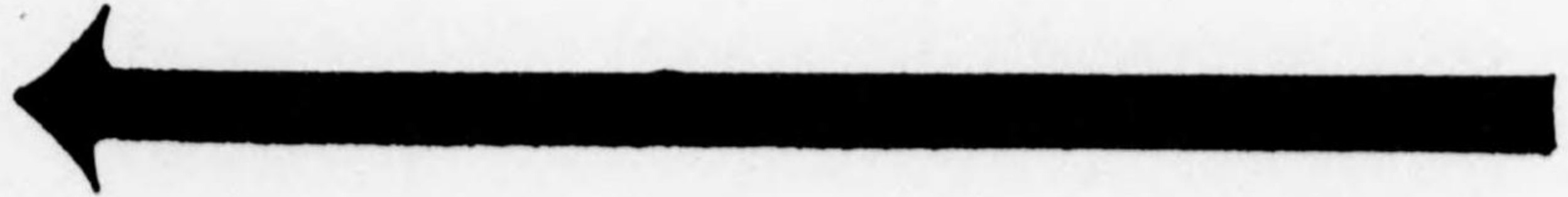




始



IT6S-83

長崎昔噺集

歌川龍平



長崎文學社版



歌川龍平著

長崎昔噺集



1933

389
3

2388
3



133038

序

長崎に住むものの喜びは、自然に恵まれてゐるからではなく、早くより文明開化の鐘にあげ古い歴史の美しさあるが故である。しかも、その歴史は、他國の史實と異り、特異性があり、大衆性があり人情味に富む。

著者は、長崎に生れて長崎に育つ。幼き頃より耳に觸れ心に秘しもののなかから、時おり新聞雑誌に發表せしものを集めて、長崎昔噺集をなす。その一篇、その一話、長崎人は心しておくべきもの、長崎に遊ぶ人は土地性を知るに便なるもの、——さあ、ごなたもお読み下さい、長崎昔噺集。

歌川龍平

目次

じやがたらお春	一
河童の誕生	二九
繪踏物語	三七
切支丹殉教哀話	五七
長崎くんち	八一
怪談一夕噺	八七
南國夜想	九五

じやがたらお春

寛永十三年、徳川家光は邪宗門を取締るために種々の訓令を諸國に下したが、長崎奉行榊原飛彈守、馬場三郎右衛門の兩人への下知状の中には、特に左のやうな項が加へられてゐた。

一、南蠻人ノ子孫日本ニ不居様ニ堅ク可申付事。若シ於相脊ハ其者共死罪、一類ハ科ノ輕重ニヨリ可申付事

一、南蠻人長崎ニ而種子並母右ノ子供ノ内養子ニ仕候之父母悉ク雖爲死罪身命ヲ助ケ南蠻へ被遣候間自然彼者共ノ内重ネテ日本へ來歟又ハ書通ノ送り於有之ハ本人ハ勿論死罪親類以下ハ科ノ輕重ニヨリ可申付事

その結果その年の末、南蠻人種男二百八十七名が遠く阿媽港に送られた。もちろん長崎へ、いや日本へ永久の別れを告げて。阿媽港と言ふのは、この頃でも「天川」或は「天河」と書かれてゐる支那の澳門と言ふのである。

寛文十六年になると第二回の紅毛人追放が行なはれた。人数は前にくらべて非常にすくない。南蠻

人種男女十一名が、澁谷助兵衛門、油井平右衛門に守られて平戸に廻され、その湊から黒船に乗せられて咬啗吧に送られたのであつた。じやがたらと言ふは瓜哇島のことである。「じやがたら」は恐らく「じやがとら」と言ふ芋の名の訛りではないだらうか。その時代のじやがたらは、日本を訪ねる黒船になくはならない湊であつた。その生活と、その享樂に。

二

小柳理右衛門の養女お春もじやがたらへ送られた一人であつた。

お春は、理右衛門の娘と阿蘭陀人センチとの間に出來た混血兒である。幼くて両親に死別し、祖父の手で育てられた。じやがたらへ流される時は年わずか十四であつた。お春は、母に似たのであらうか——混血兒には珍らしく髪は黒くて美しかつた。しかし、彼女の髪の美しさは、蒼い瞳、そばかすの多い白い頬への調和を失ひ、容貌を醜くしてゐた。いつも髪を桃割にしてゐるのが尙更いけなかつた。

利口なお春は、夫れを知らぬではない。夫れを知りながら、髪を結び續けてゐる彼女の心の奥には、同情すべき理由があつた。蒼い瞳の悲哀——それである。祖父の魂を魂としてゐる彼女は、日本娘になりたがつてゐる彼女は、矢張り、近所のお友達と同じやうに粧ひ、共に羽子板や石けり等の遊

びごとに更りたかつた。遊びながらも、自分と同じやうな混血児が居たらどんなに氣強いだらう、ひそかに夫れを思ふて心を暗くした。

じゃがたらの土を踏んでも、彼女には相變らず蒼い腫の悲哀がつきまといつた。日本人の意識をはつきり心に守つて土人に向つてゐる彼女は、相變らず髪を結び、振袖の着物で、椰子の木の蔭を歩き廻つた。赤道直下の強烈な陽の光りを桃割に、桃色の細帯に受けながら。……さんくと、

月が重なるにつれ、異國の風物に馴れるにつれ、彼女から子供々々した好奇心が次第に失ひかけた。そして、反動的に郷愁の念がしきりに湧いた。濱邊に立ち、蒼い海づらの端に腫を送りながら、靜かな長崎の自然を追想した。櫻、梅、百合、枇杷、日輪、夕顔、女郎花——とりくの花の色が、浮いたり沈んだりして彼女の心を惑亂した。

「も一度で好いから優しい日本の花を見たさ」

危く出かゝつた言葉を咽で殺した彼の頬はいつしか涙に濡れてゐた。彼女はその頬を拭はうともせず、しばらくは涙の出るに任せた。やるせなさを悲しむは享樂に近い。今の彼の心情はそれであつた。彼女は、ふと、自分が悲しんでゐる時には、同じやうに悲しみながら慰めて呉れたおたつの情けがふと思はれて懐しかつた。

おたつは、彼女の近所の二つ三つ年上の娘であつた。大人しい、情の深い、情の深いと言ふよりも世話好みの、讀書の好きな、彼女が誰よりも親しかつた友人であつた。彼女は、友達から虐げられて

おたつに劬られたことや、草艸紙を読んで貰つた宵のことや、草花の造り方を教つたことなどがしきりに追憶された。

「さうだ。妾はおたつさんに苦しい氣持を示めして送らう」

しかし。……

彼女は躊躇した。長崎で役人から、決して南蠻から手紙を出してはならない。若し左様なことをすれば、受取人は軽くて打首、重くて磔に處せられるぞ——その言葉を思ひ出されたからである。

「おたつさんに累を及ぼしてはならない」

彼女は諦めねばならなかつた。

一年は過ぎた。

二年は過ぎた。

彼女と同じやうな運命にある十一人の中にも、ぼつ／＼、彼女と同じやうな思ひを抱くものが出來、膝を合せては秘密に手紙を送る方法の相談をする宵がちよ／＼あるやうになつた。左うした大膽な事が議せられるやうになつたのも、彼等の中に、年に一度日本に向ふ商船の船員と可成親しく交るやうになつた者がゐたからである。船員の手に依つて、秘密に手紙を送り届けて貰はうと思つた。その話には彼女は喜ばされた。背を押されるやうな強さを覺えた。船の出帆までには未だ聞がある。とにかく手紙を書いて置かう。彼女は、おたつの身の危険を思ふよりも、自分自身の氣持の吐場を求

めることが急であるほど、島の生活の苦しさに苛だつてゐた。

彼女は、手紙を書きはじめた。自分の生活や今の心持をおたつに知つて貰ひ度い爲に。

三

寛永も末になつた或る秋らしい秋の午後だつた。長崎の湊を訪ずれた平戸からの旅びとが、小さな包をおたつの許に届けた。それは、今は遠くじやがたらに流されてゐるお春からの秘密な便りであつた。お春の手紙を先頃、黒船が平戸にもたらしたのを土地の人の好意で彼女の許へと廻されたのだつた。

お春の手紙を受取つたおたつは、恐怖と歡喜の二つの流れで暫らくは落着けなかつた。封を切つて好いものか、命を惜しんで乙名(町役人)に届け出るべきものか——彼女は思案に餘つた。両親に相談しようか。保守的な両親の答へは、もちろん後者でありさうな氣がする。そこで彼女は、相談は自分の心を定めてからだと思つた。

手紙を届けて呉れた人は信用が出来さうだし、親しい友人の近況も知り度いし、しばらくの後、彼女は思ひ切つて包を解いた。懐しいお春の文字は、じやがたら更紗の上に美事にすべつてゐる。更紗の裏には、綸子やら更紗やらの裁宵を、市松模様精巧に縫合せてあつた。

日本こいしや日本こいしや、かりそめにたちいで、又とかへらぬふるさとと思へば、心もこころならずなみだにむせびめもくれゆめうつゝともさらにわきまへず候へ共……

彼女は、息も吐かずに読み続け、間もなく長い便りも一通り目を通した。彼女は、お春の現在に空想を馳せたり、見知らぬ異國の風物を心に畫いたりした。三年前の悲しい訣別の記憶も、新に彼女の心に領した。特色あるお春の容貌も、幾度も眼前に浮んだ。意地つ張りな癖に弱虫なお春の性質を面白く想ひ起しもした。

彼女は再び手紙に目を通した。

三度び讀んだ。

繰り返して讀んで行く中、文章に自信のある彼女の心の奥に不満さがぶつくと湧いた。ひまな時には作歌もし草紙も綴つて心を慰めてゐる彼女だ。お春の手紙には眞情が溢れてゐるが羨しさが無い。お春の氣持にはそんな餘裕がないかも知れない。しかし自分ならば彼女は、お春の手紙を骨子として、美文的なじやがたら文を創作してやらうと、遂に遊戯心に捕はれるに至つた。

千はやふる神無月とようらめしの嵐や。まだ宵月の空も心もうちくもり、時雨とよもにふる里を出しその日をかぎりとなし又ふみも見あし原の、浦路はるかにてたれど。かよふ心のおくれねばおもひやる屋まとの道のはるけきもゆめにまちかくこえぬ夜ぞなき

御ゆかしさのまゝ、腰おれかき付まゐらせ候。前業とは申ながら、かゝるうき世にかひなき命なが

らへ申さんよりは、たゞ世になき身となり候はゞ、いかにうれしからましを、たま／＼花の世界に
むまれきて此身となれるとし月をかぞふれば、十とせあまり四とせがほどとこそおぼへ候に、かく
うらめしき遠き夷の島にながされつゝ、きのふけふとも思ひながら、はや三とせの春もすぎ、けふ
は卯月朔日、まだ東雲に、あすは出船と人の聞えつるに、せめて筆の跡にてもとぞんじ、なみだな
がら硯にむかひ参らせ候。いまだ夜ふかきほどにて、いとくられれば、ともし火すごとくとかゝけ
つゝおもひ出る事共かきつゞくるに、此文のうら山しくも古郷にかへるよと思へば、我文ながらあ
りしよりげにものかなしく

水くきのあとはなみだにかきくれてむかしいかに人のみましや

はづかしながら筆にまかせまゐらせ候。そこもとよりの御文ことに御ゐんしんとゞきまゐらせ候。
まづ／＼御つゝがなく御さなされ候よしめでたくぞんじまゐらせ候。さて／＼そこもとの御文くり
かへし見まゐらせ候へば、ひとしを／＼御なつかし御すいもしなされくださるべく候。わが身は
いまにつれなきいのちにてながらへゐまゐらせ候。いつのとき日にか日本を出まゐらせ候や。いま
はさだかにもわきまへがたふ、こなたのとし月にはなぞらへがたく、たゞよるひとなく、ふるさと
のこと、つかのまもわすれやらす、おもひなぐさむひまも御さなく候。たま／＼故郷にて見申たる
におなじものとは、月日のひかりばかりこそ、そこもとははらす候ゆへ、ひるは日の出るかた
をながめ、夜るは月の出るかたを打ながめ、袖のかはくまも御さなく候。かゝる憂世にながらへ

て、かへらぬむかしをこひしやとのみおもはんより、たゞ此世になき身ともがなとこそいのりまゐ
らせ候へ。さりながら又うちかへしおもひかへせば、世をも人をもうらむべきにては御さなく候。
幾萬づの人が、此世にむまれきたる中に、我身いかなれば異國の人の子とむまれ出たる事も、前の
世のむくひありてこそとおもひまゐらせ候。しからば今さら世をも人をもうらみ申まじき事にて御
さ候。もにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をば恨みじと、二條の後もつらねさせ給ひしと承
はり候へば、いさゝか世をも人をも恨み申さず、われからとなくより外は御さなく候。さりながら
此まゝにはてなんとは存申さず候。……

おたつが是迄筆を運ぶには、可成の時日を要した。庭の秋草にも霜が見られるやうになつてゐた。

彼女は、じやがたらに居るお春の氣持を綴ると言ふよりも、彼女自身がお春になつてゐた。それほ
ど懸命だつた。懸命だと同時に可成に出鱈目な筆を弄したので後悔した。出しもしない手紙をお春が
受取つたやうに書いたのが第一だつた。原文にありもしない和歌を挿入したのが第二だつた。

油の乗つて來た彼女は、そんなことを氣にせず筆を進めて見ようと思つた。手紙の性質を次第に
失つて行く創作「じやがたら文」は、今宵もおたつの脳裏からしぼり出されやうとしてゐた。

……
たゞ一たび神や佛の御あはれみにて日本へ歸申へしとこそ思ひまゐらせ候。たとへ三日をすぐし待
らできへ果まゐらせ候共、いさゝかくるしからず候。とかくすへは日本のつちとなり候はんと存じ

まゐらせ候。あはれく神や佛の御はからひにて今一度御けんに入申たくと、くれぐれ念願にて御座候。もしも又此世にて逢申さず候はゞわが身かねく申たるごとく、友だちは七世の契と承りまゐらせ候へばかならずく來世にてはめぐりあひ申べく候。げにく御かたみの短尺、又おし鳥の羽など、かた時も身をはなし申さず持まゐらせ候。必ず必ず來世にては、こそをしるしにてめぐりあひ申べく候。又ぞやわが身花だんのはなとおほせられて、御みせなされ候こそしづ心なくきえかへりまゐらせ候。此花のさかりには、もしさまとこそながめまゐらせ候に分れ分れになりはてし、ひとりながむる山ぶきの、とへどこたへぬいろなれば、そさまの花の袖の香に、おくれし夢の面影を、見ることもだにもまぼろしに、あふはあふかはもろ共に、つゐに消なん露の身のわれや先だつ、人やおくる、うらめしやありし世にだに戀しきを、めがれなく契まゐらせ候はで、今は何事も、みなあだこととなり行、むかし語と成まゐらせ候事こそ、ふかきおもひのたねとあこがれまゐらせ候。あらこひしのそさまや、しばしの友人や、ひとへ二重の色のみか、やへ山吹をおくり給ふ情のいろくちはてすおもへとの、御心のうちとこそおしはかられまゐらせ候。

山ぶきの花の千しほはかはるともいはぬいろをばわれわすれめや
われらこゝろの中、いさゝかゝはりなふくれぐれおもひまゐらせ候。

もろともにもうえてながめし山吹のちりてもはなのおもかけぞ見る

なつかしやこひしや、古郷を出しは、いつの時日にやとおもへば、袖のかはくまも御座なく候。い

やしき夷の島にすみまゐらせ候とても、御おもひすてくだされまじく候。わがみの露は秋の田の、穂のうへてうすいなづまの、光のまもわすれ申さず候。折から雨風のそよぐにつけても、御なつかしおぼしめしやられくださるべく候。あまり日本のこひしくてやるかたなき折ふしはあたりの海原をながめ候より外は御さなく候。げにや古き歌に、大ぞらはこひしき人のかたみかはものおもふことにながめこそすれと讀し人までも身のうへにおもひあはせまゐらせ候。又すぎにし彌生三日の日、家の内の女ばう達、みなくあそびに出られ候に、わが身もさそはれ候へ共參申さず候。それにつきても、そのもとの御事共おもひ出まゐらせ候。もしさまへかやうにわかれ申事、かねてより存じまゐらせ候はゞよるひるとなくはなれ申さず、なれむつび候はん物を、いつまでもとおもふのから、有のすさびにもてなしまゐらせ候事、今さらく心にかりまゐらせ候。わするべき時しなればむむのよるはすがらにゆめに見えつと、古ことの葉におしはかりくださるべく候。細ごま申入たき事、濱の眞砂のかすく候へ共、あまりく心見だれ、あとさきわかちかね候まゝ、あらまし申まゐらせ候。助右衛門様九郎様同じことに申まゐらせ候。又ぞやこうぜん町おかたさまへ。文まゐらせたく候へ共出船いそぎ候まゝ、そへ筆申まゐらせ候。おたつさまへ申入候。何とて御文こまゝとあそばしくだされず候や。心もとなく存まゐらせ候。かならずく此舟のかへさには、御文くはしくあそばしくださる可候。まことに我身居申居申時とおぼしめし、きくを御見捨くだされまじく候。かならずく秋の頃はこまゝとの御文まぢ入まゐらせ候。何ぞおんしん申

たく候へどもめづらしき物も御さなく候まゝ、そのぎなく候。心ざしばかりにおび一すじおくりしんじまゐらせ候。もはや日本の花などは、みなくわすれ候て、あらましおぼへ候ものばかりぬいまゐらせ候。もし人の笑ひ申候はゞ、給そらごとゝおほせ被下候。又また平吉様へ申まゐらせ候。御無事の上しめでたくぞんじ候。ことに御文うれしくおもひまゐらせ候。しかれば何とて毎年御文くだされず候や。そののみふしんに思ひまひらせ候。たとへそれがしかたへ文たまひ候ずとも、御心かはりとは存申さず候。かまひてく此便には、御文こまくまぢ入まゐらせ候。かやうに申候もせめて御筆の跡戒共とぞんじ、なかめまゐらせ候はんまゝ、こまなくとあそばしくださるべく候。あらむかしこひしやかしこ。

一 おたつさまへまゐらせ候。爰もとあつき國にて候ゆへ、それより少持わたりまゐらせ候をみなくつかひきり候まゝひようぶきよう一かい、此便にたのみまゐらせ候。細ごま申たく候へ共、筆にはつくしかたく候。下のうばへも申まゐらせ候。すいぶんくそく才におはし候へ。わがみもやがて歸國いたし、御けんもじにて申まゐらせたく候。あら日本こひしやゆかしやなつかしや見たや見たや。

一 杉かさ、この手がしわのたね、杉のたね、はうきぐさのたね、御ゐんしたのみまゐらせ候。かへすくなみだにくれて、かきまゐらせ候へば、しどもどろにてよめかね申べく候まゝ、はやく夏のみしたのみ入候。我身事今までは異國の衣しやう一日もいたし申さず候。いこくにながされ候

とも、何しにあらえびすとは、なれ申べしや。あら日本戀しやゆかしや。見たや見たや。

じやがたら

はるより

日本にて

おたつさま

まゐる

半年あまりして、おたつのじやがたら文は筆蹟のみならず用紙まで模して書き上げられた。自分ながら旨く書けたものだと思ふほどに。殊に結末などは、原文に『かへすがへすなみだにくれて書きまゐらせ候へばよめ申まじぐ候まゝ火中にたのみまゐらせ候。わが身は今まで異國のしようぞく一日もいたし申さず候。あかゝしらはつき合申候へどたゞく日本戀しやゆかしやなつかしやめでたくかしく』と書いてあるのにくらべ、數等の出来ばえだと思つた。

しかし、おたつはお春の深い心事まで細ち入ることは出来なかつた。この手紙を異國へた立つた人の久し振りの便りにしてしまつた。筆を弄し過ぎ、お春が長崎の女だちと度たび便りをしたやうにした。ために、この秘密な便りの持つ印象が非常に薄められてしまつた。彼女も夫れは知つてゐた。知つてゐながらも此文を其儘にして置いたのは、自作に満悦し、この上の勞をなさうと思はなかつたからだつた。

彼女は、この文の末尾に、この文を書くに至つた動機を細ごまと示め、「寛文十九壬午年の秋、肥前國長崎筑後町、おたつ」と署名して手文庫の奥深く納めた。彼女の遊戯心は、恠うして此名文となつた。

四

西川如見は、長崎鍛冶町の寓居で、京都の書林の需に座じ「長崎夜話艸」の著述にかゝつてゐた。寛永から七、八十年あまり後、正徳年間のことである。

「長崎夜話艸」の一之巻は、「長崎由來並鎮懐石之事」を第一章として筆を進めた。が、一向にはかどらなかつた。参考書の讀破にも意外な努力を要した。史料も思ふやうに集らなかつた。それに彼は七十近い年である。意志の強さに氣力がともなはなかつた。目の疲れが何よりも彼を苦しめた。しかし、幸にも如見の一子忠次郎の努力に依つて、著述は遅れながらも歩みを續けた。

「黒船入津之始之事」

「祝ふ島之事付俊寛死所之事」

「野麻權現並白御崎觀音之事」

「有馬氏黒船燒討之事」

「邪宗門制禁並黒船停止之事」

如見は朝から書齋にこもつてゐた。新に筆を染めた「紅毛人子孫遠流之事」と題する一文の推敲に更つてゐた。

又寛毛十六年己卯の事にや紅毛國も蠻國に類せし水土なればその種子日本の種子に混雜すべからずとて則平戸長崎に在し紅毛血脉のともがら十一人じやがたらへ放流せらる。(中略)紅毛船又は唐船も往來ある故に故郷の觸き程あるひは友だちなどへ文つかはし送り物などしなしありし其事に、長崎何れの町の女人父は紅毛人にて母方のよしみあるが本に養はれ居たるに此年十四歳なるをじやがたらへながされたり。此女顔かたちいとうるはしく手習ひ常に草紙などならひてさかしきこゝろばへなりしが、かゝる所に放たれつゝ何のゆかりもなき程にて明くれ故郷へ歸らん事を神に佛に祈りつゝ年月を送りしが、かくてひとりありはてぬべきすがなければ命の露のよるべもとめてもろこし人の妻となりてぞありける。此國には唐土人も多く住居して又年ごとに日本へ來る唐船もあれば其便に文おこせしあり見る人涕おとさぬはなし。よしなきものながら三千餘里の遠つ島よりなされたゞよひきぬる水くきのいとめづらしく哀れにもおもほへぬるまゝにこゝにしるし待りぬ。言のはの貴き賤しきは撰めるにいとまなし。

讀み終つて彼は溜息した。文章の拙さ力弱さに腹が立つた。彼が「水土解辨」「怪異類」或は「天文義論」を著した頃は、年も若かつたが文章に活氣が漲つてゐた。つひ一と月ばかり前に書いた「蠻人

之子孫遠流之事」の末尾などは、いま読み直しても自信が持てた。

……かりそめの旅路の分れをだに石となりしなげきもあるに今をかぎりの別れ路よすがら手を
取かはしかほさしあて物もいひあへず、まして船に引寄せらるゝ如きは夢かうつゝか我か人とそ
ゞろごと聞えて中々たへも果てなんとするもあれど、命だにあらば又公けのゆるしもあらんと定め
なき世を頼みてよと人々のいさむるに又たどるこゝちにて舟そこにあふしゝづみて折から風だにつれ
なき追手にて島がくれ行しこそあはれなりし世なめりし。

それに引替へ、この文章はどうであらう。自分は肉體が衰へるばかりか頭腦まで衰へたのかしら彼の
氣持はすと暗かつた。

如見の惱みは、文章の拙さばかりでなく、この文を色づけやうと思ふお春の手紙が少しも面白くな
いからだつた。外に、四、五通のじやがたら文が集つてゐるので、せめて其中から抜かうと思ふて讀
み返して見たが、やはり彼に満足を興へなかつた。幼稚であるか内容が下らないか、そのいづれかで
あつた。

折角蒐めた貴重な材料を捨てるには忍びなかつた。彼は、机に凭れ再びじやがたら文を讀みはじめ
た。しかし……

彼は腹立しそうに腰を浮かし縁端に出た。薄暗が樹木を包んでゐた。彼は花を、殊に夕顔を好んで
ゐた。庭には幾鉢かの夕顔が盛つてゐた。四邊りはひっそりして物音ひとつだにしない。夕顔の花

も、薄闇に白さをなへて微動だにしない、彼の神経もやゝに静まつた。静つた心に、彼はある思案
を浮べた。自分でお春の手紙を骨子としてじやがたら文を創作しよう。その決心は、瘦せた彼の頸
にわずかなながら血の色を漲らした。

彼がじやがたら文を創作しようとした翌日だつた。彼の長男正休が、ふとしたことから、おた
つの手になる偽作「じやがたら文」を手に入れた。正休は、それを讀んで感心した。父も感心するに
違ひあるまいと思つた。

正休の察した通り、如見は此文に魅せられてしまつた。そして自分の創作をよして、この文を「紅
毛子孫遠流之事」の後に付けることにした。と同時に彼はおたつに非常な興味を覺えたが、彼は無
名な女子の存在はどうでも好かつた。この文に依つて、自分の著書の價值が高まること、何よりも
望ましかつた。

如見は、偽作「じやがたら文」からおたつ附記を削り、少しの手も入れないで、お春の手紙の如
くにして著書の一頁を飾らした。おたつの遊戯心からなつた作品は、七、八十年を経て西川如見の名
利心に利用されるに至つた。

それから二百餘年の後、大正三、四年の頃だつた。

東京市神田に軒をならべてゐる古本屋をあさつてゐる紳士があつた。瘦軀をステツキに託しながら。——その人は貴族院議員竹越三郎氏である。彼は三又と號し、尾崎行雄、田川大吉郎氏と共に政治家中の名文家と知られてゐた。殊に、「二千五百年史」は、彼の副産物として著名なものである。彼が神田を歩くのは、あながち好書癖からばかりではない。古文學への興味から、隠れたる名文を紹介したいとの野心が強かつた。

古本屋をあさる人が誰しもさうであるやうに、彼も珍書を安く手に入れたと思つた。掘出しものを願つた。しかし、古本屋が軒を並べてゐる神田とは言へ、さうく掘出しものがある筈はない。五軒、六軒と、丹念に書籍に目を通して行くうち、彼は甚しい疲労を覺えた。厳しく張つた肩は、いつの間にか落ちてゐた。

彼は歸らうかと思つた。しかし、何かしら割り切れないものがあり彼を思ひ切り悪くした。も一軒廻つたら、そこに何かしら彼が期待してゐるものがあるやうな氣がした。彼の歩は次の家に移つた。

「長崎夜話艸、西川如見著。特價三拾錢」

かねてから名前のみ聞いてゐた和本が、彼の眼前に、しかも安い定價である。

彼は喜んだ。それを求めて電車に乗つた。そして書生のやうに頁を開いた。十分、二十分電車の時間は長かつた。彼は、やがてじやがたら文を読みはじめた。すると、彼の瞳は異様な光りを帯びて來

た。恰も、議政壇上で大見得を切つた時の如し。いつにない感情の昂奮が來たのだつた。その感情の昂奮は、やがて左の如き活字となつて「實生活」誌上に現れた。

……李陵廣武の往復の詩書を読み嘆かざるは友情を知らざるもの、孔明出師表を読み泣かざる者は義理を解せざるものといふを得べく人ば、「じやがたら姫」の「じやがたら文」を読み泣かざる者は人に非すと申すべし。

彼の文章はじがたら文の激賞で、夫れ以外のことには言及してない。恐らく、彼は西川如見の著書の内容を其儘に受入れたのであらう。受け入れるのが當然である。西川如見の虚榮心は、大正の政治家の善愚に依つて完全に目的を達しられた。「長崎夜話艸」も、より多くの讀者を持つやうになつた。

……日本婦人が生みたる無垢無辜の少女。然かも千古の名文を咄出し得たる程に、愛國婦人、愛の情思ある少女を異境に貶諦して草の如く亡び木の如く卒らしめたる一事に至りては、徳川代の罪犯遂に掩ふべからずと存じ候。嗚呼古今文を草する者幾百千人幾十萬篇、而して多く朝霧暮靄と共に消ゆる中に此一少女の文留めて天地の間に存するもの果して何の故ぞ、是一考を要する所と存じ候（大正五年十一月發行、實生活所載文から）

その頃長崎では古賀十二郎氏が、日本切支丹史を研究する傍ら、長崎郷土史の研究に没頭してゐた。彼はその爲、あらゆる名譽職を放擲し、家産を蕩盡し、なほも研究を續けてゐる篤學者であつた。

ある新聞は、彼を奇人だと冷笑した。ある雑誌は、彼を長崎の生字引だと褒め稱へた。ある博士は彼を、隠れたる日本吉利支丹研究家だと推稱した。彼に取つては、そんなことは迷惑だつた。いや、どうでもよかつた。彼は超然として、貧と戦ひながら孜々として道に遊び、事を極めやうとしてゐた。

彼は此頃、じやがたらお春の研究に餘念なかつた。歴史家は、もの事を數理的に研究しなければ満足出来ないものである。彼も、多くの参考書を傍にし、金を勘定するかのやうに、夜の更けるのを忘れて机に向つて居た。

まづ順序として、お春の身元から調べかゝつた。「長崎夜話艸」に、「長崎何れの町の女人父は紅毛にて母方のよしみあるが本に養はれたるに」とあり、「通航一覽」に、「はる、自注、長崎築町小柳理右衛門爲に養子、同酒屋町峰七兵衛爲に姪、同袋町本田與三郎爲に伯母」とあるのを見て彼は、母は小柳氏に相違ないだらうと思つた。その思ひから、長崎本蓮寺過去帳を見ると、次のやうな記載があつた。

寛永十三年正月十六日

幼心 筑後町阿蘭陀センチ子

寛永十四年九月二日

妙進 筑後町阿蘭陀内ヲバ

之はお春の一家のものと思像した。夫れにしても蘭人が佛式の法證を得たるは珍らしいことと思つた。

お春が長崎を追放された年代に、寛永十三年説と寛永十六年説とある。彼は、夫れを明にしようと思ふた。

「長崎年表」の寛永十三年の項に、「長崎出生の南蠻人種男女二百八十七人を、阿媽港に放つ、女お春なるものあり、此時年十四、後二年消息を通ず、之をじやがたら文と謂ふ。お春元祿七年彼地に死す」とあつた。しかし、彼は此記事に信用が置けなかつた。阿媽に流されたとすれば「まかを文」と稱せられなければならない。そんな疑問を抱きながら、寛永十六年の項に目を移した。

蘭人英人及子女十一人を本國に送る、筑後町に蘭人二人、英人一人、子女二人、榎津町に蘭人英人あり、此月皆不戸に付し蘭船に托して本國に送る。

彼は、先日手に入れた寛永十六年の送り状を取り出して見た。處どころ蟲ばんで居たが、讀むに困難は感じなかつた。

一、おらんだひせんで

年七拾

一、同女房
年五拾

一、いぎりす女房
年三拾七

一、娘まん
年拾九

一、同はる
年拾五

一、孫萬吉
年三三つ

右合六人

十右衛門

筑後町乙名 久保

寛永十六年卯九月十四日

一、阿蘭陀メイス
年七拾

一、同女房
年五拾

一、ウイワン
年二拾九

一、同女房
年拾六

一、同悴
年二つ

榎津町乙名 田中

莊左衛門

表書の男女六人五人當年辰候阿蘭陀船に慥かに相渡可被申候

九月十七日 大河

善兵衛

馬場

三郎左衛門

松浦肥前守殿

この書類は、「長崎拾芥記」その他の記事と一致する處があつた。お春は、正しく寛永十六年にじやがたらに送られたのであらう。

次に彼は、お春の年齢について調べかけた。「崎陽歳代記」元祿七年の條に、「じやがたらお春死す、流人の時十四歳なり文通の時十六歳なり、今七十一歳なり」とあつた。彼は指を折りながら年の計算に暫くは時を費した。隣室には、多くの子供が寝てゐる。階下には妻が子供に添寝してゐる。夜は彼ひとり訪ずれたが如く静かであつた。

彼は、急に暗げれとして、煙管を取つた。さつまいの甘い香りが彼の鼻口から白い煙となつた。いま、で、「長崎拾芥記」の十五歳追放説に疑問を抱き、「長崎夜話艸」の七十六歳死去説に首を傾けてゐた彼は、始めて錯誤のない年代の計算に北叟笑んだ。「崎陽歳代記」の記録が正しいのを嬉しく思つた。

次つぎに史實を明らかにした彼は、「長崎夜話艸」の「紅毛人子孫遠流之事」の頁を開き、改まつた氣持でじやがたら文を読みはじめた。明晰なる彼の頭腦は、讀後、たゞちに四つの疑問を抱かせるに至つた。

第一に、夜話艸にあるじやがたら文は文章が巧妙であるから後人が偽作したのではあるまいか。第二に、原文を後人が文飾したのではあるまいか。第三に、緒々の琴線にふれて肺肝から出たも

のであるから名文必ずしも偽作ではあるまい。第四には、偽作とは思はれない點がある。それは文面に表はれてゐる植物に関する趣味である。この文に凝はれてゐるやうな嗜好や知識は、俄につくれるものではない。……

彼は、この疑問を解く爲に幾時間か、もく／＼として煙管の遊戯を續けてゐた。だが、さすがの彼にも、この疑問を解く想像力がなかつた。漸く得た斷案は四つの疑問を一つにしたに過ぎなかつた。

……このじやがたら文を見れば、文章は巧拙相ばしてゐる。絶對的に偽作とは認められない。も／＼實際のお春の書簡があつたのだが、その文章の一部分が虫蝕破損してゐたので、この文章を發見した人が文才あるもので、不明な個處を補綴し、かつ又飾をほどこしたのであらう。書き直したものは、「長崎夜話艸」の編輯者西川忠次郎（如見の子）ではあるまいか。

この考察は、彼としては次頃でない氣持よさだつた。未だ一人として、此處までの詮索を及ぼしてゐないことが、何よりも彼の愉快さであつた。彼は、笑を洩らして机を離れた。優しいおたつの心情は、彼にもまだ救はれなかつた。

夜は、いつの間にか明け離れてゐた。明るい自然が泥酔したかの如く、彼の家を取巻いてゐる。電車の走る音が、時折り、遠くから流れて來たりする。それを消す人の足音——彼は階下に降りた。そして、いつものやうに明日の晝までの眠りを取うとしてゐる。

昭和元年の暮。蒲原春夫は、いつものやうに、あの光りを慕ひながら銀座街頭を、今宵は珍らしくも芥川龍之介氏と同行して歩いてゐた。

春夫は昂奮してゐたらしかつた。彼の茶色の目は、氣味の悪いほど冷たかつた。彼は日和下駄の音を立て立て、芥川氏にしきりに話しかけてゐた。この頃の書きかけてゐる「じゃがたらお春」の腹案を。

芥川氏は幾度もうなづきながら、しきりにゴールデンバットの煙りを吐いてゐた。

二人の足音は早かつた。しかし、夫れは寒さの爲であつて、神経は可成り疲れてゐた。

ある喫茶店の重い扉を押し、隅の卓に二人が腰を落したのは夫れから間もなくだつた。春夫は相變らず「じゃがたらお春」の話を續けてゐる。

「夫りや面白う」

春夫の話が終つたとき、芥川氏はさう言つた。「書いて見たら好いだらう」

「もう大部書いてゐます」

「さうか。明日でも持つて來給へ」

春夫は返事する代りに頭を下げた。彼の蒼じろい頬には血の色が漲つてゐた。芥川氏が斯う言ふかには、この原稿もどこかへ世話して貰へる、枚數も五十枚を出るだらうから一枚三圓にしても百五十圓これでこの月の暮しも大丈夫だ彼の身内に、こんな喜びがあつたのも嘘ではない。

「お待遠さま——」

女給は、彼等の備に、焼林檎とカツフヒを並べた。春夫は、ふと、その女の顔を見上げてぞつとした。その女は、反感に満ちた瞳は彼をぢつと見詰めるじゃがたらお春だつた。

白い皿の上——ほそい一筋の煙か焼林檎の上に立つてゐた。(終)

河童の誕生

河童の誕生地は長崎縣である

と云ふこと

河童は、わたしどもに信仰に近い童話的存在である。あの眞黒い裸の姿、頭に皿を頂き唇の尖つた異様な姿、どこかいたづら小僧らしいおどけた姿は、たしかに、日本人のもつてゐるある一面を表現した微笑ましい存在だと言ふことが出来る。

わたしは小さい時から、町の古老に河童の話をよく聞かされた。だが見たことはない。話す人も、恐らく見たことはないであらう。嘘だと解つてゐながらも、その話に心惹かれるところに河童の魅力がある。

では、河童とはどんな姿をしてゐるだらうか。「和漢三才圖繪」卷の四十、佐類の項に左のやうに書いてある。

「河太郎は西國、九州の溪水や池川の中に多く棲んでゐる。十歳ばかりの小兒のやうな姿をしてゐて常に裸行である。歩行も出きるし人語もよくする。髪の毛は短く、頭上に凹みがあつて、常に水をたゝえてゐる。常に水中に棲んでゐるが、夕陽の出る頃になると瓜や茄を盗みに河邊に出て来る。相撲を好む性質であつて、人を見るといどみかゝつて相撲をとらうとする。ある若者が河童に向つ

て相撲をとつたとき、まづ俯向いて何度も頭を振ると、河太郎も、それを眞似して頭を數回ふつたので、いつの間にか頭の水をこぼして負けたさうである。頭に水がある時は非常に力が強く、人間の倍の力を持つてゐる。手は、非常に長く、前後左右に能く動くので、牛馬を水中に引き入れて、尻から生血を吸ふたりする。河を渉る人は慎しまなければならぬ」

この本には、河童のことを河太郎と書いてあるが、「本草綱目啓蒙」には、河童の異名を澤山書いてある。その重なるものをあげて見ると、水虎、カツバ（江戸、奥州）ガハタロウ（畿内、九州）カハノトク、カハツパ（越後）ガハタロ（京都）カハコ（雲州）ガハラ（越前）カハコボシ（山田）カハコゾウカ（白子）カハロ（桑名）カダラウ（上州）グハタロウ（防州、備後）エンコ（松山）メドチ（南部）ガウゴ（備後）カウラワラウ（筑前）テガハラ（越中）ミヅシ（加州、能州）水唐などと甚だ多い。長崎ではガアツパと言つてゐる。

この異名でも判る通りに、河童の傳説は全國到るところに残されてゐるが、大同小異で種類別になると四、五十もあるまい。河童の傳説は、肥前の國に始まり九州に流れ、全國にひろがつたと言はれてゐるが、長崎縣は河童の傳説の誕生地であるだけに種いろの語り草が残されてゐる。長崎縣の中でも、五島地方は、その元祖と言はれてゐるだけに、未だに數多くの傳説が島人の口から口に傳へられてゐる。その代表的なものをつつ御紹介して見よう。

河童を相撲で負かして臍を 取られた話

五島の玉の浦に、力自慢の若い漁師がゐた。ある夜海岸を歩いてゐると、海の中から眞黒い怪物が飛び出して相撲をとらうと言ふ。見るとガツパである。(五島地方では、河童のことをガツパまたはガア太郎と云ふ) 漁師は力自慢ではあるし、こりや面白いと思ひ相撲とる氣になつたが、たゞで相撲とつては面白くないと思ひ、何か賭けやうと云ひ出した。そして、その相談の結果、漁師が勝つたらガツパから百兩の金を貰ふこと、河童が勝つたら漁師の臍をとることに話が纏り、いよくハツケイヨヤ。両者は何回も何回も仕切直しを致しました。漁師は、河童の頭にある水をこぼして力を弱めやうと計つたからです。あ、取組みました。四つになりました。懸命にもみあつてゐます。勝ちました。

漁師が美事にガツパを投げとばしました。さあ約束の金を呉れと漁師が云ひますと、ガツパは感待つて下さい。すぐ持つて来ますからと云ひ、海中に飛び込んだかと思ふと、直ぐ姿を現はし、こゝに現金がありませんから、この手紙と壺を持つて、鬼岳の沼にゐる私の親分の處で金を貰つて下さいと言つたので、ガツパは嘘を吐かないものと信じてゐた漁師は好い氣になつて鬼岳の沼の邊りに行き、

水面に向つて手を叩くと話の通りガツパが飛び出して来た。

俺は玉の浦から来たものだと言つて、その壺と手紙を渡すと、そのガツパは、手紙を読みながら急に嬉しさうな顔をして漁師に向ひ、お前さんはこの手紙を読みなされたかと言つた。いや讀まないと言ふと、さあ讀んで御覽なさいと言つてさし出したので、開いて見ると、

親分に人間の臍を百とつて差上げやうと思つて壺にためてゐたのが九十九になりましたが、百人目のこの人の臍は私の力でとることが出来ませんから親分の神通力でとつて下さい。

と、書いてあるので、漁師は仰天して逃げ出さうとしたが、河童の親分にはかなはない。忽ち水中に引きづり込まれて臍をとられたと言ふことである。

河童から土産に大きな青石を 貰つた話

五島の福江にも、こんな傳説がある。

舊幕時代のことである。福江に松島某と云ふ氣の強い町人がゐた。下五島を縦貫して流れる一里川の川沿で、岐宿から福江に歸る途中に、怪異の群が戯れてゐるのを見て吃驚した。怪異の群は彼が近くで窺ふとも知らず、石橋の上で二組、三組、相撲をとつてゐた。生れつき勝ち氣で相撲好きの彼は

ちつとして見てゐることが出来ず。矢庭にその場に飛び込み一番勝負を挑んだのである。

相撲は彼の勝であつた。彼は、相撲で河童を負かした上に、その腕を抜きとつて、秋の日暮れの道をいそぐと我家に歸つた。次の夜である。表戸を叩きながら、何ごとか訴へるやうな泣聲がした。起き出て見ると、前夜の河童がしよんぼりと立つてゐる。なにしに來たんだと怒鳴りつけると、腕を返して呉れと泣きながら頼むのであつた。しかし、彼はどうしても承知しないで追ひ返してしまつた。すると、翌日も、またその翌日も、夜になると河童は腕を返して呉れと頼みに來た。餘りいらしさに、彼も五日目の夜に河童の腕を返してやつた。すると、河童は非常に喜んで、今後必ず此家を守りますと繰り返し繰り返し禮を言つて立去り、その證據にと、十人位で抱へるやうな大きな青石を庭先に置いて行つた。その石は代々松島方に傳つてゐたが、今は、福江の波止場に河童の石として残つてゐるさうである。

この二つの話は、五島の傳説としてばかりではなく、河童の傳説として非常に面白い代表的なものであらう。九州では五島について、河童の傳説の多いのは天草である。太田南畝の「半日閑話」には、「九州にては餘國と違つて河童多し」として、數多くの物語を示し「天草島民誌」や高木敏雄氏の著書などにも天草の河童の傳記が種々記されてゐるが、こゝでは天草のことは書かず、長崎市附近の河童の傳説を探して見ることにする。

河童は左甚五郎がつくつた と云ふこと

「諸國軍人談」と云ふ書物に、

「長崎のさる處に、澁江太夫といふ者、河童の害を避ける符を一般の求めに依つて賣出してゐた。この符を所持する者は不思議に難を免れる。

また諫早の邊りにも、河童が多く、毎年夏季になると、多數の人が命を取られる。然るにこれを避けるには「兵輔（土地の名）に、川たちせしを忘れなよ、川たち男われも菅原」と言ふ一首の歌を書いて河流に流せば、その難を不思議に免れる。菅原とは、土地の天満宮を指して云ふ。

ある時長崎の番士が、海上に石を投げて、その遠近を争ひ、賭事して、毎日のやうに遊んでゐた、する、ある夜一區の河童が、前記の澁江太夫の家を訪れて、さも不平さうに「近頃私の棲家に、毎日のやうに夥しい石を投げる者がある。かくては一族の迷惑一方ならず此上は災をなすことを承知ありたい」と言つたので、澁江も驚き河童を宥め歸し、さて番士達にその事を物語つて、河中に石を投げることをば固く止めさせたといふ。」

と書いてある。また、「甲子夜話」と言ふ書物には、

對州（對島の國）には河太郎あり、浪よけの石塀に集まり群をなす。龜が石上に出て甲を曝すが如にし。その長二尺餘にして人に似たり。老少ありて白髪もあり、髪をかうむりたるもあり、また逆に天を衝くも種々ありとぞ。人を見れば皆河に没す。常に人につくこと狐の人につくと同じ。また別の箇所左のやうな面白い一文がある。

「この物は龜の類にして猿を合はせたものなり。或は立ち歩することありしとぞ…綱に入て擧ぐるときは其形一圓石の如く。忽ち水に投すれば四足頭尾を出し水中を行去ると。然らば全く龜の類なり。河童の傳説は、さがせば探すほど數多く興味深いものであるが、長崎と河童の本家争ひをするかの如く、長崎の島原とすぐ隣り合せ天草に河童の誕生を傳ふる傳説がある。このことを「天草島民誌」は凭う書いてゐる。

昔、名人の大工さんが城を造る時、人手が足りなくて澤山の人形をつくり魂を入れて仕事を手傳はせたが、怠けたり、言ふことをきかなかつたりする時は、才槌で頭を叩いたので自然と頭の上が凹んで來た。仕事がすんでから、お前たちのやうな役にたゝぬ奴は人の尻でもとつて食へと言つて追ひ拂つたので、人形は川にゆき、河童となつて、今でも頭の上は皿のやうにへこみ、人の尻をとつて食ふやうになつた。

島の人は、この大工を左甚五郎として語り傳へてゐる。左甚五郎は、長崎市の松森天満宮にも話を残してゐるが、河童は必らず有名になると弘法大師と同じやうに全國に話題を残すから面白いではないか。

繪踏物語

その一

徳川幕府時代、長崎をはじめ諸國の切支丹信徒を取締るために、寺請證文、屬託金、禁書、起請文、鎖港、穿鑿式、一紙證文、二季届、繪踏——この九法の宗門改制度を定めて、その信仰の有無を厳しく検査した。

わたしは今、その宗門改めの一つである繪踏のことに就いて一文を成さうと思ふ。歴史は、殊に恠うした史實の記述は讀物として實に退屈なものである。で筆者は、出来るだけ平易にそして興味的に此筆をやらうと思ふてゐる。

木下杢太郎氏が、その著「南蠻寺門前」の中にだつたか、『美しき聖母の顎、十五世紀伊太利畫家の常套を襲ひたる褶多き其衣、或は身勞れてマアテル（母）の膝に倚る受難者のジエズス・キリシテの裸の肩は、古來幾億の人の足跡に磨滅して硬靱の銅板、猶護謨の如き滑澤柔軟の面を現はしてゐる』と、上野博物館に陳列されてゐる十九枚の繪踏板のどれかに就いて述べられてゐる。さうした繪板を下におき足で踏むことを、繪踏または踏繪と言つたのである。

古賀十二郎氏の書かれたものに『繪踏と言ふ言葉は外國の文書にも認められるが、多く民間に用ひられたやうである。踏繪とは専ら公間に使用された。然し兩者に確たる區別があつたのではなく時と場合に依るのである』の文句があるが、現時は多く繪踏なる言葉が歴史家の間に用ひられてゐる。また長崎では一般に踏繪なる言葉は決して用ひない。そこで長崎人であるわたしも、好んで繪踏なる名稱を此文に用ひようと思ふのである。

その二

わたしは、此處で少しく諸書に現はれた繪踏に関する記録を抜記して、讀者の参考に供したいと思ふ。

——寛永六己巳年には、踏繪といふ事も始る、今の踏繪の形なる物を紙に書き、踏せしとなり、然るに、紙にては度々踏破申候故、其後伴天連共が尊像を鑄崩して、今之踏繪板になし、鑄物師道介倅祐佐と云し者、是を鑄けるとなり（六本長崎記）

——肥前長崎港毎歲正月四日以後一七日のあいだ、踏繪とて絜利斯當か所崇之像をひろく市井に出して諸人にふませ侍る。正月十日後は、長崎近き城府へ此繪をわたしてふませ侍へる、異邦之船入津すれば、先かならず船中の人に後繪を盡く踏せ、然して其土の街談を聞て後、船より上げ侍るとなん、且齋來の書籍は一所に上させ置て、通事等の役人考改、若天主法あれば即焼く、先年一書あり、よみて何事としらず、其理通じ難きものあり、或通事考へ、これを横行によみしに、皆耶蘇が邪法な

りしかば、やがて官に告て、其船ともに焼きしづめ侍りしとかや（鹽尻）

——邪宗門御禁制の趣、慶長元和の頃より年々嚴密に被仰付、正道に歸誠し改宗する者には、其寺より宗旨改の請合證文を出させ、猶又切支丹之佛像を紙に繪書て一人宛に踏しめらる、是を踏繪と云、然るに、數人に踏ましめる事なれば、繪紙破裂故、其後は木板に彼佛像を彫込て踏しめらる、是を繪板と云、是も數年の後、木板を踏破る、依之、寛文九年、當地本右川町に祐佐と云鑄物師有之、此者に唐銅にて彼繪像二十枚鑄さしめられ後年迄是を用らる（長崎志）

——長崎には、毎年夏に至て、切支丹之像及び其道具など虫干する事也、其像は畫像もあり、象牙にて造れるもあり、皆礫にかゝれり、今も年々正月三日頃より踏繪をなす、是切支丹之像を板に彫りて是を踏せり、尤地役人あまた附添廻り、家々に至りて右の繪板を踏せ、帳に名面をしるし、印形を押させてこれを徴とす、儲その繪にも色々の模様あり、大かたは刑に行はるゝ形を彫りてあり、是皆切支丹の像とこそ、すなはちそれを踏て、邪宗にあらざることを明すなり、わけて丸山町寄合町の踏繪は、遊女をのゝ粧かさり、美麗をつくして踏ことなれば、市中貴賤遊治郎にも姿を變し、面を掩て見物にいたる事なりしに、近き頃群集之者ども口論を起せしことありしより、今は見物の者漸くおとろへたりとぞ（崎陽隨筆）

——踏繪の始まりしは寛永五戊辰年水野氏の御時に轉びの者を試す爲め切支丹の尊信する掛物の繪像を以て之を踏せらる、翌年竹中氏掛物並に鑄物の銅像あるを版に彫り入れ廣く是を諸人に踏ませら

る、同七年庚午年大阪より邪宗門の乞食七十人送られ來る是はその頃大阪に於て之を改むること嚴密なるにより乞食非人となりて匿れ居たる執着深きものどもなれば長崎より警固の士並に通詞名村八左衛門を差添へ呂宋國へ流罪せり、今乞食非人穢多に至るまで踏繪あるは此因縁とぞ聞へける、寛文九年河野氏の御時に繪像破れ銅像不足なるにより本古川町祐佐に仰付られ唐銅にて廿枚の繪像を造る、一説に銀屋町より細工人を呼び誓詞を出させ西役所の前に假屋を構へ廿枚一日に鑄造なると云へり（長崎港草）

——踏繪のことは筑路々にかぎる事なり、是は年始三ヶ日過て、四日より長崎の町々へ奉行所より其繪を渡さる、段々に踏んで次々に相廻すなり、其踏と言ふは、唐銅にて造る火入の火屋の様なる丸きものに、人形を彫たるなり、人形の圖は刑罰に逢ふ體の圖也、耶穌の本尊なりといふ説あり、其所以分明ならず、何れ其類の物と見えたり、重々の箱に入、服紗包にして常は奉行所に藏め有之、以上十七面有、一面ごとに其繪の形少しづゝ違ふ、其内一面年始に出る也、扱右之繪を其町へ請取、有合ふ貴賤男女老幼、或は他國より參り合居候者迄、人別不洩様に踏みて次の町へ相廻す、毎町此の如し、府内踏畢て奉行所へ返上す、異國人にも始て崎府へ來る者には是を踏す、毎年來る者は其に不及、阿蘭陀計は被除之、其譯を知らず、疑らくは渠は蠻人之内なる歟、右之通、長崎中相濟す、九州路の諸大名より追々使者以、右之繪を奉行所より請取られ、領分の者に踏せ、長崎へ返達せらる、是九州の宗門改とかや、去に仍て、餘國のごとく宗門帳杯といふ事なく、一ヶ年一度づつ踏繪にて相濟なり

(翁草)

以上書き抜いた記録をわたしは正しいと言ふのではない。見られる通り諸説紛々——いや相異つてゐる。が、わたしがこれらを列記した主旨は、その頃の雰圍氣の情緒と繪踏に關する概念を、まづ讀者に知つて頂き度い爲である。

その三

繪踏の制度は何時の頃から行はれたのであらうか。判然とした記録はないが恐らく、鎖國以降のことで南蠻誓詞などに見られるのがその發端であらう。そして一般の年中行事となつたのは寛永の中頃からである。

俗説に依ると、繪踏の制度は澤野忠庵がとゝのへて、彼と後藤了順等が立會つて寺社などを場所として、そこに人民を集めて行つたとの事である。

渡邊庫輔君は澤野忠庵に就いて、恚う書いてゐる。(澤野忠庵は、南蠻歸化人で、背教者クリストファン・フェレエラとして知られてゐる。)

もと、ゼスイツト派の宗務長として、幾多の苦闘を嘗めて布教につとめたのであるが、のち、我朝の禪宗に歸依した。そして、邪教徒を奉行所に密告した。その爲に、西坂の刑死に會ふ者數千人に上つた。

繪踏板は寛文九年、古川町の住人萩原祐佐の手に依つて作られた。彼は長崎奉行竹中采女正の命を受けると共に西役所にこもり、人との交通を絶體にさけて鋭意、その仕事に従事したとのことである。出来上つた繪板は實に美事なものであつたので、一時はその功を賞せられたがその爲に、切支丹の宣傳をするものではないかとの疑を受け斬罪に處せられた——この傳説が蘭人マイランの『ジャパ』に見られる。

繪踏の制度が廢し始められる氣運に向つたのは安政になつてからである。安政四年、長崎奉行荒尾石見守の訓令の中に(來春の踏繪は見合すべし)の項目があり翌五年には、英米佛和露五ヶ國との開港條約が結ばれ其中に、繪踏廢止の約束をなしてゐる。で其以後は、繪板を用ひない簡單なる繪踏日の形式が明治の始めまで続けられたのである。

明治七年九月、その繪板は長崎縣廳より教部省に送られ、教部省はその保管を帝室博物館に命じた。博物館に現存するものは乃ちそれであつて、左の様な種類である。

×板の踏繪十枚

○第一號

繪像、サンタマリヤ。頭に七星。足に弦月。板の上端に鐵の環あり。木質櫨の木。
板（長七寸。幅四寸八分五厘。厚一寸二分五厘）
銅牌（長三寸四分五厘。幅二寸四分五厘）

○第二號

繪像、サンタマリヤ。七星弦月。四隅に童兒あり。
（單位寸）
板（長八、二五。幅六、二五。厚一、二五）
銅牌（長三、一五。幅二、二）

○第三號

繪像、荆冠縛手のヤソ（金釘で打ちつける）上部中央に穴あり。
板（長八、一。幅六、二強。厚約三分）
銅牌（長三、一五。幅二、二）

○第四號

繪像、サンタマリヤ、ヤソ、及び拜者數人。周圍にジュヅあり。木質不詳。上端に鐵の環あり。
板（長七、八五。幅六、二強。厚一、二）

銅牌（長三、五八。幅二、五）

○第五號

繪像、荆冠縛手のヤソ、木質不詳。
板（長八、一。幅六、三。五。厚一、四五）
銅牌（長三、一五。幅二、二）

○第六號

繪像、サンタマリヤ、ヤソ及拜者數人。周圍にジュヅあり。
板（長八、九。幅六、三。五。厚一、二五）
銅牌（長三、五八。幅二、二）

○第七號

繪像、ヤソ十字架にある圖。背景ウエルサレム。木質不詳。
板（長八、三五。幅六、三。厚一、四）
銅牌（長六。幅四、二）

○第八號

繪像、荆冠縛手のヤソ、裏面上部にニヶ所の切込あり。
板（長八、三。幅六、三。厚一、二）

銅牌（長三、一五。幅二、二）

○第九號

繪像、荆冠縛手のヤソ。上部中央に穴あり。

板（長八、一五。幅六、二五。厚一、三）

銅牌（長三、一五。幅二、二）

○第十號

繪像、サンタマリヤ、ヤソ及び拜者數人、下部に穴あり。中央にキレッツあり。

板（長七、九五。幅六、三五。厚九、五）

銅牌（長三、五八。幅二、五）

×眞鍮の踏繪十九枚

○第一種五個

繪像、荆冠縛手型。

長、六寸二分九厘

幅、四寸五分五厘

厚、七分五厘

○第二種四個

繪像、ヤソ十字架より下れる圖。背景ウエルサレム遠景。略第一種に同じ。

○第三種四個

繪像、サンタマリヤ、拜者數人。

○第四種五個

繪像、ヤソ十字架にある圖。足元にウエルサレム遠景。

○第五種一個

繪像、第三種に同じ。周圍にジユヅあり。

（以上。帝室博物館藏品目録参照）

しかし、是等各種の繪板は、後期のものであつて其前は、長崎の古記録其他にも残されてある通り、聖像の掛物、または聖像の紙片などを踏んだものである。もつゝ後になると、板或は金屬の表面に油繪を以つてし、色彩心理の踏むものゝ心に及ぶことを巧に利用したのである。

踏繪は、始めは信者から沒收したものを用ひ、次に其を板などにはめこんで用ひ、そして最後に、現世に傳はる繪板を萩原祐佐が製作するに至つたのである。

長崎の踏繪行事は一月三日、まづ町年寄から行はれるのである。四日から八日までには町人一般の踏繪である。九日は銅座町に於て諸役人の踏繪があつて、此行事の七日間は了るのである。そこでわたしは、踏繪行事の有様と其頃の長崎の正月に就いて、少しく筆をやることにしよう。

正月元日。

年の瀬は、諏訪氏神のお神樂の響に明けて、峨眉山上に初日が赤々と輝くのである。町人は、舊年の儘の姿にて、表戸を閉ぢた中に在つて、新玉の壽を自祝し、屠蘇を酌み雑煮を食するのである。

雑煮碗の中には、餅、蒲鉾、はんぺん、龜の子（大根）、鶴の子（芋）、唐菜、烏、大魚（鰯）などが、混入されてある。餅は、搗き立て、未だ温みの失せない中に、焼火箸を井に當て、用ひる。大根は、餅がお椀に着かぬ用意の爲に底に敷しくもので有るから、食べないのを禮儀となされてゐる。家族の膳の向ふには、すわり鯛と稱して、頭つきの鹽鯛を据へて縁起を祝ふ。

玄關には、屏風を立て、蓬萊を飾り、その前に名刺文を具へて、賀客を迎へる。蓬萊は、白米を盛り松竹梅を立て、榎、勝栗、野老を撒布したもので有る。

座敷に招じられた客は、手掛臺をおし頂き、屠蘇、雑煮、菓子等を饗ぜらる。手掛臺は、三寶に紙を敷き、餅の上に根引の松、橙、昆布、ゑび、包鹽、恙うした物を載せてある。

この日、「用器報じ」と稱される特殊な風習がある。それは、日頃用ひた家具類に骨休みを與へて、秘藏の品のみを用ふることである。無性の茶碗、小皿に至るまで、優しい長崎人の心を受けるのである。

る。

正月二日。

俵子賣の呼聲に夜が明ければ、家々は、商初め、彈初め、吉書初め、仕事初めの賑かな聲に満つる。町人が、年賀、參詣に忙しいのは此日である。

俵子賣と云ふのは、海鼠を賣る魚屋のことである。町人は、海鼠を俵子として購ひ、繪の中に刻み入れて食するを例とする。その日は、賣る者は値段を云はないで差出し、買ふ者、それを問はずして志を紙に包んで報ゆるのである。

正月三日。

悠長な平和な正月は、この日を以つて最後とする故か、町々は非常な賑ひである。その中に、神官寺僧が市中を廻禮し、祈禱札を配る姿が目立つて見える。

踏繪の行事は、此日に初まるのである。町年寄は、奉行所に出頭し、踏繪を了へて邪宗徒でないことを、まづ示さなければならなかつた。

正月四日。

ちやるめら、しやぎり、太鼓、萬才、小兒手踊に浮れ、番留多、福引、羽子板に疲れ、屠蘇に酔ひ、楽しく嬉しく三日の日を過ぎた町人は、恐怖と緊張に満され此日を迎へるのである。

早朝、町年寄は奉行所に出頭して踏繪板の下附を受け、これを各町の乙名に配布する。乙各は直ち

に、日行使に踏繪板を持たせ、組頭、小役人を従へて、紋服姿で町内を廻り始めるのである。「お出で御座います。」

先頭に立つた日行使の口から、さう叫ばれると、家人は慌て、戸口に、一行を迎ゆる。彼等は、この事あるを兼ねて期して居るので、多く紋服姿である。

廳で日行使の手に依つて、箱は開かれ繪板は取出され、家の上り框に置かれる。そして、乙名は、用意の宗旨改繪踏帳を取つて、主人始め家族の姓名を、読み上げる。名を呼ばれた者は、一人々々立上り、先づ足袋を脱ぎ、右足をあげて踏むのである。

病人は、足元に踏繪板を据へられ、赤兒は母に抱かれて、踏ませられるのである。

前記のやうな方法で、繪踏行事は行はれた。そして、宗門改踏繪帳に各人の印を取り、各町の乙名組頭が奥印をなし奉行所に納められたのである。

その五

繪踏の形式にも異つた場合があつた。それは、丸山遊女及び外國人に増してゐる。

遊女の華美は今も昔も異なるものではない。そこに特異な世界を開き、その時代の文化の一面、言葉が過ぎたかも知れないが、代表してゐると言つても差間違えあるまい。その頃の丸山遊女は、阿蘭陀渡

りの黒羅紗か黒天鷲絨に五彩の絲と金絲銀絲を以つて繡ひつぶした襦袢を身に纏ひ、頭には鼈甲簪及び銀簪を加へた優美婉麗な粧をして、乙名の宅に足を運んだものである。繪踏をする爲に。

町の人々は、丸山遊女の繪踏衣裳を見る爲に集るので丸山は其日、非常な混雑を呈したとのことである。で、一時はその見物を禁止したこともあつた。さうした事柄の感興ある説明が、江戸の唐來參和がその著「和唐珍解」に釋しく述べてゐる。

丸山遊女の繪踏は夕繪と單稱される。それは繪踏を夕刻了へて歸ることから起つた言葉である。期日は正月八日である。

繪踏の法は内地人に止まらなかつた。朝鮮人、支那人、和蘭人——長崎に来る舟人の總てに行はれた。

彼等は入港すると共に、出張の役人に依つて乗組員の姓名、積載品の有無を嚴密に行はれて、船上にて繪踏を行つた後に始めて、上陸を赦されたのであつた。しかし、阿蘭陀人は一時は厳しく行はれたもの、後には殆んど行はれないやうになつた。それは通商上の關係からであつた。

唐寺の繪踏は市内一般がすまされた後に、寺社役人が唐寺に出張してその式を行つた。日時は、十日、十一日、十二日頃である。しかし、住職のみは特別に是を赦された。

長崎に市が開かれ旅人が多數入込むので彼等を、勝山町の奉行所に呼び寄せて繪踏を命じた。四月十日である。

最後に今一つ注意すべき特殊の場合は、諏訪神社の宮司、及び士分の者は繪踏するに及ばなかつたことである。

繪板は大町に一枚、小町は二町に就いて一枚の割合であつた。大町一日に十町、小町は一日に十二六町——さはした平均のもとに日割を定め、正月四日の大黒町に始まり同九日の銅座町に了るのである。

長崎市中の繪踏が終ると、長崎近村の繪踏が引續いて行はれる。

一月十二日、十三日 長崎村十三郷

一月十四日、十五日 浦上村山里

二月十六日、十七日 淵十三郷

二月七日 日見村

二月八日 古賀村

四月十日 茂木村、川原村

四月十一日 樺島、野母村

四月十二日 高濱村

長崎近村の踏繪が終ると九州諸地方十ヶ所に踏繪が施行されるのである。肥前の島原、平戸、大

村、五島、筑後の久留米。豊後の杵築、竹田村府内、日田、日向の延岡。

繪踏のことに就て、長崎地方では、朝繪、前繪、一番繪——こうした代名詞を以て、午前中の繪踏のことを稱へた。後つて午後に行はれる繪踏繪、夕を、後繪、二番繪と稱へたのである。

支那人は繪踏のことを躑銅板と言つた。吳南溪が著は「崎誌舊語」にその言葉が見えてゐる。吳南溪は長崎に長らく在住し唐通詞を以て業としてゐた人である。

その六

繪踏する切支丹の心持はどんなであつたらうか。その多くは強ひて踏ませられたものである。そこに、様々な氣持が彼等の心を虐げて、苦しみとなり悲しみとなり惱みとなりで、今の世に繪踏にからまるローマンスとして残されてゐる。

繪踏をするは汚はしきことである。また自己の氣品を傷けるものである。その心持が初期の信者の大部分の傾であつた。

『うば並に女などは、でうすの踏繪をふませ候へば、上氣さし、かぶりものを取捨て、息合あらく汗をかき、又は女により人の不見様に、踏繪いたゞき候事も有之由』

『繪踏の節は頭を不踏と申儀は心得居候へ共御役人様目前にては左様にも仕得申不候。心に思ひ候まゝにて歸り、でうすに御斷り神酒相備へ申候』

右の古記録を見ても解る通りに信者の心持は苦しいものに違ひなかつた。浦上あたりの熱心な信者になると、繪踏をすました後は天主にさゝげた水を取つて自分の足を洗ひ、その水を飲み干してでうすに罪を謝したさうである。

それは、一時的の心の苦痛に堪へて、永久の信仰に生きようとする利口な心もつ信者の道であつた。自分の信仰を汚し、神の祟りあることを迷信して、繪踏を拒む邪宗徒もあつた。盲目的な信仰を持つ彼等は、踏板に向ふと、お前は自分を土足にかけるのかと云つた、神のお聲に惱まされて、どうしても繪踏することが出来なかつた。行事を拒む者よ、死は必然である。斬首、磔、或は温泉の熱湯に投げこまれる——その苦痛も、（殉教すれば天國ヘイイに行かれる）との信念を持つた邪宗徒には、喜んで殉教の道を取つたのである。

繪踏の行事も、年を重ねて繰り反へされてゆくうちに、踏む方にも種々と氣持の變化があつた。そこに、聖母や聖子に禮拜者數人を配した踏板を踏むとその年の縁起が悪いなどの迷信が生じたり——また踏ませる方に於ても、奉行所から申請け、且つ宗旨帳面も奉行所に納めてあつたものが、寶曆三年に至ると代官手限りとなり天明年間になると代官手代から之を成すやうになり、次第に形式も疎雑になつて行つたのである。

要するに繪踏行事は時代をふると共に亂雜に、いや臆朧となつて行つた。そして明治の開化は、その廢止を行はせるに至つたのである。

わたしは、繪踏の史實を不満足ながら書き了はせた。はじめは、繪踏行事に伴ふ種々の傳説にまで筆を運ぶ積りであつたが、それは他日の約束として今度は、これで「繪踏物語」の筆を結ぶことにする。

切支丹殉教哀話

女人の意志

寛永時代になると、長崎地方では益々禁教を犯すもの、數を増して、若し嚴重に取締るとすれば長崎地方民の過半數を處刑しなければならぬ。夫れではどんな事態をかもすかも分らない。——長崎奉行水野河内守の心痛はそこにあつた。

で、彼は長崎始め近接各地方の奉行を呼び集め、その取締方法を協議したのであつた。その結果、信徒の頭立つものを苛酷な拷問に處して轉宗させる、若し應ぜなければ慘忍な處刑をして他の信者の見せしめしよう、さうすれば、氣の弱い信者は懼れをなして轉宗するに違ひあるまい、——と、なつたのである。

その時代の話。

長崎の牢舎に、ペトロ庄左衛門及び其妻スザンナお松と言ふ浦上山里村の百姓が捕へられてゐた。ぞして、白州に引出されては度々轉宗を勧められたが、どうしても應ずる色を見せなかつた。史實はその時の有様を可成詳細に傳へてゐるが、夫れを見ると事實と思へない程に慘酷を極めてゐる。

殊にお松は、雪の降る夜に、衣服を剥ぎ取られ楠木に縛りつけられた。そして頭から冷水を浴せられて轉宗するかどうかと責められたのである。然し、彼女は依然としてオラツシヨ（祈禱）を誦して

弱る氣色も見せなかつた。いや、反つて反抗的な氣勢をあげたのである。そこで、役人は三歳になるお松の一子を引き出して彼女の足に縛り着け、若しお前が教へを捨てなければ此小兒を五分斬にして斬殺すべしと責めかゝつた。小兒は、寒さと苦しさで聲を限りに泣き叫んでゐたが、

その聲も次第に細く、遂に口を動かす許りとなつた。その時、小兒の乳母は餘りの事に堪へ兼ねたのであらう。奉行の膝下に走り寄つて、あの子供はスザンナお松の子ではない自分の子供であるから、宥して呉れと願つた。一生懸命に——

默念と祈りを捧げてゐたお松に、その聲が身に這入ると彼女は目を見開いて、否いや我が子である。天主より給ひし御子である。我が子と共に殉教するのは此上もない身の果報である。自分は如何に責められても、おん教へを捨てないであらう。奉行は人の道を知ざる者である。女より生れながら女を責めるとは、なんと言ふ大邪非道の人であらう。と言つた意味を、何ら臆する色もなく高だかと言ひ放つたので、奉行は殊の外怒つて、子を愛する事を知らざるは畜生にも劣つた奴である。好し夫れならば。——で、彼はお松に鐵の首枷をはめて庭の藏に投げ込んだ。そして、食物も與へなかつたので、スザンナお松は夫れから二ヶ月目に餓死したのであつた。

この話に限らず、女人は宗教的感情に捕へられると非常に意志が強くなるものらしい。いや、夫れは本人の無智より来る盲目的信仰の結果かも知れないが、大抵の男は應はないやうである。

信仰には無形的な目的がある。佛教徒は死後の安樂を極樂に求むるが如く、切支丹信者はパライン

(天國)に求めた。ではパライソとはどんな處であるか、詳しく言へば随分長くなりさうだから此處では簡単に述べることにしよう。天主のおん教へを信すれば死後は必らずパライソに行ける、パライソには苦しみも悲しみも悩みもなく、有るものは楽しみ許りである。パライソには魂ばかり行く。従つて姿も形もない譯である。魂の安住の世界には人の世の醜い意識などは露ほどもない。それを、その頃の切支丹信者は殉教すれば必らずパライソに行けるものと誤信して、あゝした強い意志の動きとなつたのであらう。昭和の世の我々から考へると餘り馬鹿ばかり過ぎる事であるが、その頃は眞面目である。いや、死を覺悟して教へに継るほどだから、布教者の方でも棄教するのを懼れて、暗に殉教するものゝみに、パライソの幸が與へられるやうな口吻を洩らしたものであらうと思はれる。

慚 悔 状

同じく、寛永時代、長崎に於ての話だ。

ある秋の末西坂の刑場でヨハネ内膳と其妻モニカの両者が斬首の刑に處せられた。

このモニカはスザンナお松にも劣らない程の強い信仰の持主であつて、時の奉行多賀主人を苦しめたものである。

奉行はどうかしてモニカを棄教させようと思つたのであらう。嚴寒の日、彼女を呼出し、轉宗し

なければ衆人の前に裸體にして曝すぞと言つて威喝した。すると彼女は、自ら帯を解きながら、自分は如何ほど責められても恥しめられても決して決して轉宗致しません。お言葉に依つて衣服は自ら脱ぎ捨てますが、體の皮は自分で剝ぐことは出来ませんから恐れながら奉行様の御手を煩はしよう存じますと、反つて、奉行に逆襲したのである。

皮肉な、此の言葉を受けた奉行は非常に怒つて、それではお前を遊女として道樂者や破落戸に身を汚さしてやるぞ、と言つた。彼女は、身は汚しても心は汚さない積りだから勝手にして呉れと、如何にも冷然たる調子で應じた。

調べる者が調べられる者に辱かしめられる結果は、常に恐ろしい事實を語つてゐる。——この場合に於ても、奉行は冷靜さを續ける事が出来なかつた。弱い者を憎めば、その憎々しさは際限なく増大されるものである。奉行の憎しみも募つた。彼は下役に命じて、モニカの良人ヨハネ内膳を呼び出さして、その前で皮肉にも、轉宗しなければ自分自らお前の身體を犯してやるとモニカに言つた。そしてモニカを別室に連れ込もうとした。

内膳は、どうして夫れをぢつと見てゐる事が出来よう。モニカは貞操よりも宗教を重しとしてゐたが、彼は其の反對の氣持の持主であつた。いや、自分の妻を他の男に凌辱される嫉妬さからであつたに違ひあるまい。彼は遂に轉宗させる事を奉行に誓つて、妻を自分の手に戻すことが出来たのである。

奉行は女人を責めて、轉宗させる目的を達した譯である。しかし、此方法は信者の肉體に苛責する事よりも餘程効果があつたらしく、多賀主人に依つて發明された此方法は、その後代々の長崎奉行の眞似ることになつた。

轉宗したヨハネ内膳夫婦は、その後どうなつたか。記録に依ると、内膳は轉宗した事を非常に恥ぢて、長崎を始め島原、平戸、大村、佐賀の各地の教會に懺悔状を送つて、寛永の末年、モヒカと共に殉教したさうである。

繪踏

寛永八年の事である。伴天連ヅキンセント・カルヴァルホウは肥前島原で繪踏を強ひられた。

繪踏とはどんなものであるか。わたしは此處で簡単に説明して置かうと思ふ。繪踏とは徳川幕府が諸國の切支丹信者を取締るために制定した宗門改めの一種である。南蠻繪などと稱せられる、キリストの像やサンタマリヤの姿を書いた繪板を、足で踏ませることに依つて、切支丹信者であるかどうかを調べたのであつた。此方法は寛永の始めから明治の初年まで、一種の年中行事の如く九州の諸地方に行はれたのである。諸地方と言ふのは、肥前の島原、平戸、大村、五島、筑後の久留米、豊後の杵築、竹田、府内、日田、日向の延岡である。

繪踏を強ひられたカルヴァルホウは、どうしても踏まうとはしなかつた。役人はなるべくならば繪踏させて罪人にしたくないと思つたので、幾日も幾日も、カルヴァルホウを責めて半死半生の目に會はしたが、彼は依然として自分の意志を持ち續けた。

ある日のこと、役人は再び来て、聖像を示しながら是を踏んで放免されることを願つたら宜からうと懸命に勧めた。自分がお前に斯様な事を勧めるのは今度が最後である。拒むに於ては温泉の熱湯のなかに突き落すであらうと言つて脅迫した。

カルヴァルに取つては憚うした事はなんでもなかつたのである。それ程、彼は信仰を重しとしたのであらう。衰弱しきつた手で自分の足を指しながら憚う答へた。

——御覽の通り自分の足は腐爛し、あまつさへ鮮血が浸んでゐる。斯様な足で天主の御像を踏む位なら、自分は兩脚を切斷されても構はない。否、温泉の中に投入られる事が寧ろ體しい位である。

それは、信仰を只一つの道として生きるカルヴァルホウに取つて、當然すぎる程當然な道であつたらう。信仰が人生の唯一の目的であるとしたならば、彼は最も尊敬すべき聖者と言はなければならぬ。目的の前に一時の苦しみを押へることは、我等が想像するよりも容易な事であつたに違ひあるまゝ。

しかし、切支丹信者と言へども、同じ人間である以上、三節に渡つて述べたやうな事實は、まこと

に寥々たるものである。其多くは、信仰よりも生命を重しとして、なほ信仰に縋らうとする利口な人間であつた。さうした者に取つては信仰は一種の遊びである。人間が持つ情熱の捨場であつたに違ひない。或は、慰安の爲のみの宗教であつたに相違あるまい。

拷問

徳川幕府が切支丹信徒に向つてなした拷問の方法や刑罰の種類は、人間が考へ得る最極度の酷刑だと言つても過言ではなかつた。それ程、殘忍苛酷を極めたものであつた。殊に長崎地方は、切支丹信者が最も多かつただけに、かうした事實の數限りなく殘されてゐるその二つ三つを、わたしは書てみようと思ふ。

拷問の方法の中に三木責と言ふのがあつた。これは、竹を三角形にけずり、手の指のなかに挿し込み、また指の間にさうした三角形の竹を挟ませ、その竹を役人が押へて苦しめる方法である。是等は、長崎奉行所で始めて行はれた方法であるが、随分極端な事をしたものではないか。

死刑の方法には種々な殘虐な方法が工夫された。釜煮、磔、逆磔、牛裂、火炙り、鋸引など、言葉

を聞いただけでも身の毛が立つてはいないか。

鋸引と言ふのは身體を土中に埋め、首だけを殘して、竹の鋸を持つて三日も四日も、掛つて其首を引いて處刑したものである。

火炙りの方法も慘酷なもので、成るべく身の周圍から離して薪を積み上げて、その薪も一時に燃え上らないやうに濕して置いて、長い時間をかゝつて、丁度、肉を火に焙るやうに、燻殺したのである。

第六代の長崎奉行竹中采女正重義は、最も惡辣を持つて聞へた人である。その人が行ひ始めた方法に、「逆さ吊」と云ふ刑法がある。「逆さ吊」は別名を「穴吊し」とも言はれる。

此方法は重に、切支丹徒を轉宗させる爲に行なつたものである。その方法は、地に幅二尺深さ六尺許りの穴を掘つて、穴の側に棒を立て、それに囚人の兩足を結びつけ兩手を背中に繫縛した囚人の身體を穴の中に逆さに吊つたのである。そして、幾日間も食物は勿論水も與へないで半死半生の間に於て轉宗させようとしたのである。兩手を背中に縛り上げたのは、囚人が苦痛に堪へ兼ねて棄教せんとする時の合圖が、穴の上から好く分る爲である。

此の苛責を受けた事の實驗談が「日本西教史」に記載してある。夫れに依ると、此の逆さ吊は種々の苛責中最も堪へ難いものであつたらしい。逆さに穴の中に吊り下げられると體内の諸臟腑はことごとく胸の中に集まるやうに思はれて胸苦しく、言葉も出すことが出来ないものだつたさうである。

また血液は循環を阻止されるので、次第々々に下降して来て、頭は鐵板に押へられたやうな苦しみを
感じ、聽ては、耳や口や鼻から出血するに至る。と同時に筋は張り、骨は痛み、何んとも言へない苦
しさに氣が狂ふ許りになるものださうである。かうして置かれると、餘程健全な身體を持つてゐる人
でも三日と持てなかつた。假令、轉宗して赦されても、長い間と言ふものは身體がはつきり恢復しな
かつたさうである。

しかし、此方法は轉宗させる爲には仲々効力が上つたと見えて、竹中采女正の自慢の一つとして記
録されてゐる。

竹中采女正は今一つ、惡辣な方法を編み出してゐる。「温泉ヶ嶽の熱湯責」と傳へられてゐるのが
夫れである。

夫れは、改宗しない切支丹信徒を、長崎から程近い温泉ヶ嶽の山中に連れて行き、ブツブツ湧出し
てゐる熱湯の傍に立たせて、轉ぶことを強ひた。夫れでも肯んぜない時は、衣服を脱がせ、熱湯を柄
杓で汲んで遠慮なく肉體へ浴せかけたのである。二杯、三杯と続けられる。囚人の皮膚は見る見るう
ちに縮り上つて、する／＼と紙のやうに剝ける。さうした身體にも、熱湯は續けてかけられるのであ
る。

その苦しさに氣を失ふものもある。氣を失つたものは、傍の小屋に連れ込んで、數日の後、元氣恢
復した頃を見計つて、また前のやうな方法を續ける。これには大抵の者は參つてしまふらしい。さう
して最後を遂げたもの、死體は、全身が腐爛して膿汁を生じて、膿汁の中には蛔が這廻つてゐるな
ど、二目と見られなかつたさうである。が、さうなつても尙、氣息奄々たる者があつたと言ふから、
眞に悲慘の極みではないか。想像するだに心の震ひを覺える。

神父ヂタシヨ・カルヴリヨ

元和の頃、奥州仙臺イエズス教會司祭として、熱心にその教理の布教に従事してゐたのは、ヂタシ
ヨ・カルヴリヨと云ふ葡萄牙の人であつた。彼れは慶長十四年开始て日本に渡來したが、忽ち、例の
「紅毛人追放令」の爲に媽港に追はれ、元和元年再び渡來して、主として奥羽地方の布教に従事した。
その時代、天下は既に徳川幕府に歸し、その法令もまた諸侯に遵奉されてゐたので、切支丹禁令に
依る迫害も東北地方にも及び甚だ酷烈であつた。さうした雰圍氣の中に單身乗り込み、秘かに布教す
ることは、既に死を覺悟しなければならぬ仕事である。死を覺悟したカルヴリヨは、寂しさも苦し
さも、意とするに足らぬことであつたらう。しかし、如何に主義の爲とは言ひながら彼がかうした悲
壯な行動に出る氣持は、現在のわたし達から考へると甚だ馬鹿らしさを覺えるのである。いや、馬鹿
らしいと感ずるのは、わたし達が餘りに功利的な利己的思想の持主であるからかも知れない。カル
ヴリヨの行爲を讚美するクリスチャンは、天職の爲には總てを抛つが吾等の取るべき道であると、辯

護されるであらう。信仰は人の心から理智を奪ふ。と同時に、理智に富んだ人に信仰などの熱情さが湧かないとも言へる。假令、信仰心が湧いても、宗教の傀儡とはならないであらう。

だが、しかし、神父ガリヴリヨは如何なる氣持で布教に従事したことであらうか。後年彼が捕縛されて、

「世上傳ふ所によると、伴天連等は宗門を傳ふるを名として、實は此の國を奪はんとする下心ださうであるが事實であるか」

との奉行茂庭周防の訊問に對しての應答振りを見ると、彼れの心事が充分に推察されるのである。「自分の生國葡萄牙は地味豊かであつて、文化も開けてゐるし、生活も甚だ容易である。さうした安樂さを捨て親兄弟に離れて、具さに三年餘の旅愁を嘗めてまでもかうした野蠻な絶海の孤島に來たのも、自分の天職を遂行せんが爲である。我が主、ジェズス・キリストの教義を、一人でも多く傳へてその人の心を開き、世を平和に導かん爲である。それを目して、國を窺ふなどと沙汰せらるゝは心外の至りである。身には寸帶をも帯びず、團を結ぶにも我等の仲間僅か數人であり、迫害を受ければ何等抵抗する由もないのではないか。」

これはカルヴリヨの見榮ではあるまい。彼ばかりでなく、切支丹傳導士は、日本人に人道主義の概念を最初に教へた人である。その心持があつたればこそ、切支丹信徒は徳川幕府が案じた如くに、少しも反抗の氣勢も見せないで死の宣告に應じたのである。あの天草亂の如きは切支丹信徒の反亂とは

言へ、原因は他にあり結果がさうなつた迄であるから異例と言つても宜からう。

神父ガリヴリヨが捕へられたのは、寛永元年三月八日である。場所は、三分村近くである。彼と同時

に捕へられた信徒は、マラオ孫兵衛、ポロ類介を始め總數十一名に及ぶと史實は傳へてゐる。彼れが捕へられた頃は、烈しい吹雪が續いてゐた。その吹雪の中を、彼等は裸體にされ、牛馬の如く仙臺城下へと送られたのであつた。その途中、寒氣と老衰の爲に歩行の自由を失つたアレキسس幸右衛門、ドミンゴ道齋は車卒の爲めに斬捨てられ死骸は雪中に遺棄されて第一の犠牲者となつた。

その一行は仙臺に送られると直ちに、奉行茂庭周防の取調べを受けなければならなかつた。奉行とても、人の情を持つものである。幾度か、邪宗徒に向つて、その棄教を勧めたのであつたが、誰一人として應ずる色を見せなかつた。應ずる處か、反つて處刑される日を催促するやうな有様である。殉教は夫れ程、彼等に取つて唯一の「幸福なもの」であつた。

奉行は、多勢だから、衆を恃む心理に支配されてゐるから、とさう解して、神父カルヴリヨを先づ説服するにしくはないと考へた。

「彼等が宗門を固執するのは、お前の感化の力に依るのであらう。お前が彼等の迷執を去らしめたならば、お前を始め一同を直ちに赦免してやるであらう。」

さうした意味を、奉行は神父に言つた。すると神父は、

「己が心を偽つてまで、人に妄を説く罪を犯すことは出來ない。自分は、益ます今後とも、彼等を、

現在の苦惱の爲に來世の禍福を誤らぬやうに諭してやるであらう」と、冷やかに、そして簡単に答へた。

その頃、多くの人夫の手に依つて、仙臺城下の外れを流れてゐる廣瀬川の河原に、縦二間半横二間深さ三間ほどの穴が掘られてゐた。穴の周圍には杭が幾本も幾本も打たれ、穴の中には川水が満された。その仕事が終わると、穴の周圍の河原に新しい竹矢來が結ばれた。嚴めしい役人の監督のもとに行なはれてゐるその工事を、仙臺城下の人はどんなに奇異な思ひを以つて取沙汰したことであらう。それは、申すまでもなく、神父ガルヴリヨを始め數人の邪宗徒の處刑場である。頑として切支丹のおん教へに離れなかつた彼等を、水責の刑に處する場所であつた。

彼等の處刑が二月十八日施行されることを聞傳へた城下の人ひとは、早朝から、先を争つて刑場の矢來を圍んだ。さうした見物人の姿で、廣瀬川の河原は足の踏場もない程であつた。

その日の寒さは、また格別であつた。掘られた穴には薄氷さへ張つてゐた。定刻が迫ると、邪宗徒は刑場に引立られた。そして、衆目の前に於て裸體にせられ、兩手を後に縛せられて水中に座せられた。水の深さは三尺餘もあるので、彼等は水上から、僅かに首を表し得た位に過ぎない。その上に、縛した繩の端は、それ／＼周圍の杭に嚴重に結んであるので、身動きも出来なかつた。

水の冷たさは、針の如くに信徒の身體を刺した。しかし信徒等は動する色も見せない。瞑黙した

儘、靜かに最後の祈禱を續けてゐる。さうした中に。神父ガルヴリヨは聲を勵まして天主の恩寵を信徒に説いて、彼等の心の亂れを防いでゐた。兩岸の見物人の胸には切支丹への憎しみの念がある。その心から發せられた罵詈雑言が、騒さうしく發せられた。だが信徒等は依然として黙禱の頭を垂れてかた。

その中に、水中に端座する苦痛が、信徒の顔面に明かに現れ始めた。寒さに赤らんだ頬が蒼味を帯び、聽て化石の如くに凝固して來て、彼等の唇から「ジェズス・キリスト」の言葉も洩れなくなつた。木造の首を水上に浮べたやうな有様である。見物人も罵聲を發しなくなつた。信徒の苦痛を恐ろしく感じた故であらう。

三時を経た後、彼等は一先づ陸上に引き上げられた。しかし、信徒の五體は凍へて、歩く力も、いや、動く元氣もなかつた。その中に只一人平然として砂上に坐した神父の姿に見物人は驚嘆の瞳を投げたのであつた。

かゝる所に、奉行所から使者が來た。使者は馬上より降りると、神父の前に近づき最後の轉宗を勧めた。

「自分は今、死に臨んでゐる。死せば一切の苦痛は去り、天上の樂園に迎へられる身である。それに何を苦しんで現世の苦痛を新にしよう」と、神父は瞑目した儘、使者に答へた。

その日は、一先づ獄舎に戻された。彼等が戻されたのは長い苦しみを覚えてゐる中に一人でも轉宗

させようとする奉行所の意嚮からであつた。

此日の水責めに命を失つた者もあつた。それは、マチヤス治兵衛。ユリアー次郎右衛門の二人である。彼等は執れも農夫であつた。

一夜明くれば、陰曆の正月元日である。元日より三日迄は、萬務廢止が奉行所の慣習であつたので、邪宗徒が再び水責に會はされ爲に廣瀬川に引き立てられたのは四日の早朝であつた。

この日、第一に死に瀕したのは、レオ横右衛門であつた。彼れは死の迫るのを知ると、自由にならない身體をカルヴリヨに近よせて、胸の底から喉まで來て、どうしても唇を洩れなかつた言葉を、神父の耳に、

「伴天連さま、一足先んずるのをお許し下さい」

と、囁くやうに言つた。そして、

「兄弟よ——主の永遠の安息に入られよ。パライスは御身のものだ」

と、神父の激勵の言葉を受けて、頬笑みながら水中に倒れた。

その頃から次第に雪は降りそめた。裸體で水中に浸る身に寒さは益ます厳しく感ぜられた。そして、邪宗徒は次から次と、所謂榮光の座に迎へられて行つた。

しかし、尙、神父ヂタシヨ・カルヴリヨは端座を續けてゐた。その唇からは、オラツシヨが洩れてゐた。彼れの周囲の浅い水中に、彼に先立つて眠つた七つの死骸が、明らかに見られた。彼は、再び

目を開ける勇氣も失せたのであらう。その儘、目を閉ぢて、心におん主の御迎への一時も早からんことを祈念した。

彼が息絶へた時には、日短かな冬の日はずつかり暮れ果て、檢視の役人も疲労と寒氣に弱つてゐた頃である。記録に依ると、彼が水中に在つた時間は十五時間、年六十四歳であつた。彼等の死骸は、翌朝、氷を割て引出され、寸斷された後に、廣瀬川の奔流に投げ込まれた。

神父ガルヴリヨが、老齡の身でありながら、最も長く水責を堪へ忍び得たのは何んの力であつたらうか。言ふまでもなく意志の力である。信仰に支配された意志の力である。だが、その結果を一面から見れば、信徒を殉教させる爲に動かされた意志であり、人に死を強要した最も殘酷な意志の働きであつたとも言ひ得るではないか。

邪宗徒の大和魂

寛永十四年正月十四日、松平伊豆守は、唐人船や紅毛船の力を借りて大砲鐵砲を以て島原城を責めた。が、切支丹宗徒は地を堀つて身をかくしたので、その甲斐がなかつた。反つて紅毛人の一人が射殺された。伊豆守は國際問題の起るのを懼れて、その計畫を中止して彼等をも解放するに至つた。

紅毛人の入國を拒み、その宗教を嚴禁した徳川家はその力を借りたのは可笑な話であるが、もつと

滑稽なのは島原城に籠つてゐた邪宗徒が、その行爲を批難した言葉である。彼等は、邪宗に歸依しても、大和魂はさすがに捨て得なかつたと見える。

刑場スケッチ

新しい世界が開かれると、明るい感覺を以つて夫れに縋がらうとする。それが信仰の場合に於ては、殊に強い傾向を見せるものである。言葉を換へて言へば、人びとの自由意志の表現は信仰心理に最も極端となる。だから、切支丹禁教令が布かれた當時に、様ざま悲劇が醸されたのは、當然過ぎる事實であつた。

慶長十八年、京都で處刑された奉教人のなかにテクルお雪と呼ぶ女人がある。彼女は町人の妻に似合ず、強い信仰の持主であつた。

彼女は、常づね傳道士から、太陽に向つて一心に祈禱するとジエズス・キリストのおん姿を拜むことが出来る、と教へられ、堅く夫れを信じてゐた。で、愈々刑場に引かれて磔臺に縛られた時、彼女は、太陽に向つて一心に祈禱を續けた。

お雪に限らず誰しも、自分の信念を通す爲に一心になれば、ある幻影を心に描くことが出来るものである。その場合、祈禱は心を靜める一種の魔藥になる。その結果彼女も、明らかに、ジエズス・キ

リストのおん姿を太陽の中に見ることが出来たのである。彼女は、天主の姿を見て、自分の日頃の信仰が迎へられたのだ。自分も天國に行ける身になつたのだと非常に喜んだのだつた。そして覺悟を定めて、時の來るのを待つた。

その時、折悪しく、北風が募つて無造作にたばねてゐた。お雪の髪を吹きまくつた。その爲に髪は亂れて彼女の顔面にかゝつて、彼女の眼界を塞いだのである。彼女はハツとした。靜まつた心は、劇しい動搖を受けて、心の幻影を消し去つた。天主の姿が見えなくなつたのだ。彼女は悲しんだ。悶えた。狂人のやうに祈禱を續けた。丁度その時處刑の時刻とはなつた。非人の竹槍は、彼女の胸深く突きさされた。彼女は、苦 紛れに身震ひをした。その拍子、彼女の顔面を蔽つてゐた髪は後方に波打つて眼界を明るくした。彼女は再び、死の刹那に太陽の姿を見ることが出来た。

太陽を見た彼女は、輝きながら幸福な死を迎へたのである。

お雪は、完全に信仰の傀儡となつた殉教者である。また、頗るローマンチックな物語を残した殉教者と言はなければならない。これに反して、滑稽な物語も切支丹殉教者のなかに残されてゐる。

矢張り、話は慶長のころの齣である。場所も同じく京都である。

捕へられた邪宗徒の中に、宗衛門と言ふ商家の若者が居た。彼は至つて、氣弱な、そして腦貧血と言ふ厄介な持病があつた。明日は處刑されると言ふ前夜、呉ぐれも仲間のものに頼むに、

「わたしは、生れつき弱い質でした、お羞しい話ですが、刀や槍などを目の前に輝かされますと、

直ぐ気が遠くなつてしまふのです。それで、明日刑場に行つて、膾炙血でも起しましたなら、嘸見物人の物笑ひの種になることせう。わたしは、その爲に、邪宗徒にあんな臆病者が居ると人びとから笑はれるのが辛らう御座いますからどうか、あなたのお力で、わたしにそんな事がないように刑場に引立て、下さいまし」と言つた。

わたしは、臆病者の宗衛門が、かうした悲壯な決心を抱くまでに教へこんだ切支丹の力に、只たゞ愕く許りである。それよりも、自分の臆病さで、奉教人の意志を疑れたくないと言ふ可憐な志を、わたしは心から愛してやりたく思ふのである。

元和の頃、長崎西坂で處刑されたパルトロメオ榎右衛門と言ふ信者がある。彼は浦上在の農夫である。彼の長子ペトロも捕へられて、父と共に處刑される筈であつたが、混雜の餘り翌日に廻はされたのであつた。混雜の餘り翌日に廻はされるほど、その頃は毎日々々數百人の切支丹が長崎では處刑されてゐたのである。想像もされない程に。

ペトロは、その時、僅か七歳であつた。奉行も可憐な幼な子を處刑するに忍びなかつたのであらう。言葉を盡して轉宗を勧めた。

「若しお前が切支丹のおん教へを捨てるならば、大切に養育してやるであらう。好きなものは何品でも買與へるであらう。どうしても、轉宗しないと云ふならば直ちに首を斬つてやるぞ」

夫れに答へたペトロの言葉は簡單なものである。それほど彼の意志は固かつた。

「假令、如何なる事があつても、キリスト様に離るゝことは出来ません。父は昨日パライソに行きました。私も早くパライソに參つて、父に遇はなければなりませんから早く首を斬つて下さい」

ペトロが刑場に引立てられてからの有様を「鮮血遺書」はかう述べてゐる。

「……獄卒に抱かれて刑場へ行く途中、數多の人に禮を爲し、扇子を持って別を告げ、既に刑せられし人の死骸の中を靜に通じ自分の首を斬らるべき場所に至り、扇子を前に置き兩手を膝の上に置いて行儀よく座り、刃を受けて命を天主に捧ぐ。今、此有様を見る人びとは大に感服し、是は全く前に殉教せし親の靈魂此子を守り、斯る不思議を顯すならんと云ひ合へり」

ペトコは自分の意志に支配されて殉教した。それを史家の筆の文は、親の靈魂云々を以てした。ペトコこそ可哀相である。

破鬼理死端

切支丹が日本に渡來し、聖フランシスコの熱心な布教に依つて、その信者も數十萬の多きに達したと誇張されたほどであつたが、天正十五年豊臣秀吉の全國教會堂の破壊、宣教師の追放等に依つて、次第に迫害され、慶長十八年の暮になつて徳川家康は「切支丹宗門禁制觸書」を出して、嚴重に異教徒を取締るようになった。

かやうに、切支丹が邪宗扱ひにされるやうになつた、原因は何んであらうか。わたしに言はせると、日本の風俗習慣を無視した、布教方法がその原因の最大なるものである。外に原因と目されるものは、佛教徒の反對、神道主義とキリスト教主義との衝突、西班牙と葡萄牙との貿易上の反目、等々、數へ立てれば際限がなかつたほどである。

その結果、民間では、切支丹の布教師は小兒を殺して肉を食べるとか、紅毛人は人買をするとか、生贖を取る、魔法を使ふ、等と流言蜚語が行なはれたのであつた。またさうした風聞を立てられるのが無理もないと思はれるやうな布教方法を切支丹は取つてゐたのである。

天正の初年のこと、肥前長崎港の東南にある稻佐嶽、その野原に毎夜のやうに不思議な景色が浮べられた。不思議な景色と言ふのは、シエズス・キリストが十字架にかけられた前に多くの南蠻人が膝まづいてゐる處や、或は、南蠻佛を禮拜してゐるものが天國に遊んでゐる處や、又は日本の佛教徒が切支丹の地獄で苦しんでゐる有様などが美しく色彩つて大きな繪畫となつて見られたのであつた。人々は夫れが何であるか、愕き且恐れた。そして切支丹の信仰に入るものもあれば、切支丹を罵るものも出來たのであつた。

暗い野原に、明るく繪畫となつて浮んだのは、幻燈に過ぎなかつた。しかし、幻燈を知らなかつたその頃の人は、切支丹の魔法で、闇の中に繪を畫くと言つて不思議がつたものである。

寛永年間、江戸に於て井上筑後守が切支丹信徒を捕へて、その教理を深く問ひ正した。その記録が、「天文末録」に詳記してある。その一項に、人類創世時代の神話に及んだ處がある。その中から、アダムとイブの話を中心に抜記して見る事にしやう。わたしは、此話に非常な興味を覺えて、讀後幾度か失笑したほどである。

『……「デウス」が人間を作り給ふは「パライソテラル」と申す所にて、アタン・エワと申す夫婦の者を作り候由、右の「パライソテラル」は萬事成所にて世界の極東の由、然る所にデウス誠め候は、「マサン」と云ふ木の實なり。然る所にアタン・エワに天狗勸め申候は「マサン」の木の實を喰候得ばデウス同然となり候ほとに、くひ可申由勸め申すに付て木の實を喰候。いましめの木の實を夫婦食し候故、惡世界へ追出され候。其たゞりにて末世の人間辛苦をいたし候由。木の實をたべず候得ば、萬事忒成をいましめをやぶり候により、デウスに夫婦のもの「パライソテラル」を追出され候。此の者人間の初にて候由。此儀を以て言へば只今の人間現在にてくるしみ、未來はインベル野へおつる事、皆デウスのしわざなり。をのれが作りたる世界の人間を惡道へ落し、又其人間をたすくべき法を弘ると云儀、首尾符合ならぬ也。又「マサン」の菓子をくらひてデウスの如くになれば菓子をくはせ助る儀をばせずして法をひろむる事大惡人大盜賊と云ふべき者也。』

右の文中、「パライソテラル」は地上の樂園、「デウス」は神、「インベル」野は地獄の意味である。

此の話の中に日本流に天狗を使つたり切支丹への反感からデウスを大悪人大盜賊と罵つてゐる所など甚だ興味深いことではないか。

長崎ぐんち

長崎のお祭りは諏訪祭り、そして大人にも子供にも嬉しいお祭りである。

わたしたちは子供の時分から、いまの子供もさうであらうが、一年もの間、お諏訪祭のことを忘れることが出来なかつた。ことに今年は踊町となれば尙更であつた。

「ことしの踊りはなんぢやろか」

「どんげん踊り子が來つとぢやろか」

などと、庭の隅、ごみ箱の蔭で友だちと語ふては小さな心にいろ／＼の色彩を浮べ、心を躍らすのであつた。

旅に出て郷愁に閉さるれば、まづお諏訪祭である。ひからびた街上に鳴る笹のそよぎである。軒なみに伸びる黒白あるひは青白の幕である。とんど柿、れんこん、栗、金米糖、ぎんなんの實——それらのものがシャギリの伴奏のもとに心に浮び、甘い感傷となる。お祭りは遊びである。

殊にお諏訪祭は大きな遊びである。遊びと言はびないまでも遊び心を誘發するを否むことは出来まい。美しい踊子が、着粧つた娘たちがまろやかに吹く秋かぜの中、秋を忘れさせるかの如く街を歩き廻るところ、遊びを誰しも思はずには居られない。遊びは賑ひである。長崎の街は、おかげで諏訪祭の三日間は旅人までも迎へて、その昔、南蠻船の訪れし日のごとく朝に夜に賑の巷となる。これは決して道學者の皮肉ではない。筆者自笑。

しかし——寛永十一年、時の長崎奉行神尾内記、同神原飛彈守の援助によつて園山の主青木賢

清が九月七日を卜して祭日と定めたのも、反面には禁教渡來の門戸たる長崎に於て切支丹の絶滅を行はんが爲の目的に出たことは明らかである。

寛永三年から同五年に至る期間は長崎奉行水野河内守、六年から九年にかけては長崎奉行竹中采女正が最も峻酷に切支丹を迫害し、切支丹宗徒の數を非常に減せしめたところである——だから信徒は、この無法な迫害に對し、なんらかの方法を以て日頃の鬱憤を拂さうとする形勢があり、長崎の湊は實に内外多事であつた。ために神社を起し信仰心を求め、祭日を制定し人の心を和めることに勉めたのであつた。

諏訪祭は年毎に盛大になり延寶の頃には「九月の祭なども所に過ぎたりなど」と謂はれ、現代も所に過ぎたる祭りとして諸人の口の端に諸國に傳へられてゐる。

寛永十一年、神輿が大波止假宮（俗にお旅所、現長崎警察署前）に渡御の儀式が行はれると共に、奉納踊、傘鉾も始められたのである。奉納踊は「遊女高尾音羽なる者神前に三韓退治の舞を奏す。之を神前舞曲の濫觴とす」と「長崎年表」に記載してあり、之が一つの慣例となり現在の如き變化に導いたものであると思ふ。

諏訪神社の行事は六月一日の小屋入を以て始る。小屋入とは、年番町の世話方、踊子が諏訪神社に詣り清祓の式を受けるのである。

十月一日、諏訪神社の事始の祭典。

十月二日。神輿渡御還御の際にお供する年番町の子供が諏訪社に参詣し衣裳着せの儀式がある。

十月三日。庭見せ。踊町ではこの日までで青竹を門前に格子のやうに張り、家紋を染めた幔幕を張り、表障子を取除き踊子の衣裳道具、親類知己などから踊子へ贈られた花菓子、へぎ面などをならべて人びとの目を楽しませる。自慢の庭、置物などをこの日を機会に飾り立てる。

十月七日。この日は、待たる、奉納踊の初日である。朝あけの港の静さを破り、踊町のくさぐさの踊りが、シャギリの音の案内に連れ傘鉾を先頭にお宮へお宮へと次から次に繰込む日である。今年の奉納踊は、寄合町、浦五島町、引地町、本石灰町、桶屋町、大井手町、船大工町、袋町、酒屋町、出来大工町などで餘り特殊な踊りは見られないが、本籠町の蛇踊、江戸町の兵隊訓練などは風變りの一つであらう。

諏訪神社への奉納がすむと、お旅所、祇園、伊勢宮、知事官舎と言ふ順序に、奉納踊は納められてゆく。

この日午後一時、三社の神輿は、諏訪、住吉、森崎の順序で行列美しく且、おごそかに大波止假宮への渡御、所謂お下りがある。

十月八日。踊町の各家では、自分の町の踊や傘鉾を知人の家に贈る習慣があるので、市内の隨所に傘鉾は舞ひ踊り子の袖は翻り、諏訪神社が市内にツバサをひろげたやうな感じのする日である。

十月九日。神輿は還御され、後日の踊りがお旅所から諏訪神社、伊勢宮、祇園と奉納され、三日に

渡る賑ひが終りを告げ大波止、或ひは出島に設けられた見世物に夜更けまで人びとの心を集める日である。

こゝに一つ——お諏訪祭にも變りたるものは、諏訪神社前、長坂に陣どる「白ドツボ組」のことである。白ドツボとは、白シャツ一枚の肌着で前夜から、この長坂に陣どる人の異名である。こゝには、むかし、土地の顔役が多くの乾兒を引連れて陣どり、役人を無視して大いに踊を彌次り出し、果ては花恥しき踊子たちを無理無體に裸にして踊らしたりした歴史を持つだけに、傘鉾の舞かたがよければ「持つて来い」「持つて来い」の叫聲をあげて幾度も舞ひを求め、若し悪ければ「持つて行け」の罵聲と共に追ひ返す一種の我儘が公然と認められてゐる。また踊り子の方では、「持つて来い」の言葉を受けるを名譽とすることも今も昔も變りない。

日は移り月は變り、お諏訪祭は依然として盛んであるが、近時、お祭りに餘り金をかけ過ぎるとの批難が、まゝ起るのを見る。これも踊町となれば各戸は少くて十圓、多くて百圓、二百圓と出費して町の踊りを盛んにする金銭上からの悩みか。だが、わたしとしては貧乏しても、かうしたものは保存し盛立て、市民の誇りともし清涼劑ともしたいものである。

文明開化と共にお祭りも盛んになつてゆく——これは簡單であるがわたしの持論である。近代人の官能はあまりに刺戟を受け過ぎてゐる。それを調和するは大衆的を愉悦でなければならぬ。それには、お祭りなど最適なものやうに思はれてならない。

怪談一夕噺

長崎の傳統——傳統と申しますよりも怪談がかつた面白いお話を二つ三つ申上げて見たいと存じます。

怪談と申しますと、得體の知れない、不思議なもの、變化のあるものが外觀的に正體を變へたものでありまして、恐ろしくもあるし馬鹿々々しい點もある。だから人に依りますると

幾ら昔噺でも理は一つだ。妖怪變化などが此世にある筈はない。成程、主觀的には存在するかも知れないが、客觀的には絶対に存在しない、科學的文明の今日そんな世迷ひ言を、聞く必要はない。

と、お叱りを受けるかも知れません。一應は御尤もであります。しかし、私は、妖怪變化を假りに實在のものとして、古來、人間とどんな交渉があつたか、私どもの祖先は、妖怪變化を如何に解し、如何様に之に對したかと言ふことを研究し、その物語の出來榮えを玩味しようと致すものであります。

お化けの本體はどんなものかと考へて見ますと

第一に人を扱つたもの

第二に動物

第三に植物

第四に器物乃ち品物の化け物

第五に自然物、自然物と申しますと石燈籠や鳥居など

以上の五種類にほど大別することが出来ると思ひます。

長崎に、古來傳つて居ります怪談は、人や動物を扱つたものばかりで、植物、器物などを扱つた怪談はほとんどないと言つても過言ではありません。それほど少いのです。また勝れた怪談も、非常に少ないのが残念に思はれます。化け方に就いても

精神的に化けるもの

實體的に化けるもの

の二通りあるやうで御座います。精神的と申しますと、妖怪の精神だけが化物の活動をして、正體を出さないもの、例へば、生靈の如く現在生存せる人の精神が様々に働くことで、實體的とは正體を現はして活動することで御座います。長崎地方に残つてゐる怪談は實體的に化けたお話が主で御座います。

前置きが大變長くなりましたがお化けの定義はこれ位にして置きまして、さあ——これから、二つ三つ、面白い怪談を御紹介して、皆様に涼しい思ひをして頂きませう。

x

x

むかし、長崎市の麴屋町に飴屋さんが御座いました。その御主人は、大變正直で、いつもここに商ひをしてゐましたので、店はいつもお客さんで一杯でした。

ある晩、店を閉めやうとして居りますと、まつさをな顔色をした若い美しい女が、飴を買ひに参りました。髪も亂れ、元氣もなく生きてる人のやうでもありません。それに夜更けです、主人は氣味悪く思ひましたが、商賣々々、女の言ふ通り一文がと飴を賣りました。

その女は、次の夜も、またその次の夜も、次の夜も、同じ時刻に同じやうに一文錢を持つて飴を買ひに参りました。

七日目の晩です。若い女はいつもより一層元氣のない姿で飴屋に参りました。

「こん夜はお金を持ちません。すみませんが、子供がひもじがつてゐますから、飴を恵んで下さい。その代りお望みごとがありますれば、どんなことでも叶へて上げますから」

と、言ひましたので、飴屋は、變んな事を言ふ奴だと思ひながら、

「水が足りなくて困つてゐるんですがどの邊を掘つたら水が出るかお知りぢやございませんか」と訊ねますと、

「ここをお掘りになつたら宜しゆう御座います」

と女は、嬉しさうに、飴を握つてとぼく歸つてゆきます。

飴屋の主人は、女の様子が如何にも先日来、變に思はれてなりませんので、思ひ切つて、そつと後

をつけて行きました。なんにも知らない女は、寺町のあるお寺に遁入り、裏手の墓地の中に行く、急に、その姿が消えるやうに失くなりました。

飴屋の主人は、吃驚して、本堂に駆けつけ和尚に譯を話しますと和尚も驚いて、墓地に来て、女の姿の消えた邊りを探して見ますと丁度七日前、身持女を葬つた新しい卒塔婆を見出しました。

すぐに、人呼んで墓を掘り出して見ますと、棺桶の中に、可愛い、赤ん坊が冷くなつた女の側に飴を握つてにこ／＼してゐたさうで御座います。

只今、麴屋町の通りに残つてゐる幽霊井戸は、その時に教へられて掘つた井戸ださうでございます。

この怪談は、長崎市に傳はる怪談で、尤も優秀なもので、棺桶の中でお産をして子供を養育する凄い話の中に、幽霊の母性愛を扱つた處が面白く、また井戸の水口を教へるなど、幽霊が決して善人に危害を加へない點を示した處など、非常に面白い怪談だと存じます。

中

長崎には河童の傳説が澤山ありますが、それに劣らず多いのは、大蛇の傳説で御座います。わけて島原地方に多いやうで御座います。その代表的なものを一つお断して見たいと存じます。

むかし島原の城下に、杏庵と呼ぶお醫者が居りました。

ある夜、右手に傷を負った若い娘が、治療を頼みに参りましたので、杏庵は親切に娘の傷を丁寧に治療しながら土地に見馴れない美しい娘でもあるし、鐵砲傷でありましたので不思議に思ひ

「何處の方です」

と尋ねますと、娘はたゞ隣村の者だと言ふ許りで、名前も告げずに立ち去りました。

月日は早くも流れ、杏庵は病歿し杏庵の孫が、矢張り杏庵と名乗り母と二人で、醫者を致して居りました。

ある年の夏、島原城下に悪疫が流行し、不幸にも杏庵も傳染し、今日か明日かの重態に陥り、母親も我が子の看病にへとくになつて居りました。

「おや、夕立か知ら」

杏庵の母が、表を眺めますと、雨宿りしてゐる美しい娘があります。あたりは次第に暗くなりますが、雨は歇みさつにもありません。母は氣の毒に思ひ、娘を家に入れて劬りました。

その夜から、娘は、一生懸命、杏庵を介抱致しましたので、さしもの難病も平癒し、親子の喜び一方ならず、娘を再生の恩人と崇めその身の上を尋ねますと、

「妾はお諏訪と申し、親も兄弟もありません」

と、涙ながらに答へましたので母は氣の毒に思ひ、杏庵の妻として、家に置くことに致しました。

夫婦の仲も睦まじく、その翌年には、早くも孝太郎と言ふ可愛い男の子を設けました。すると

「杏庵さんの子供は大蛇の兒ぢや。恐ろしい蛇兒ぢや」

と不思議な噂が城下に立ちはじめました。

下

ある日のこと——杏庵が病家の戻り、何氣なく我が家の庭敷を垣根ごしに、眺めますと、大きな大蛇が、どぐろを巻いて可愛い孝太郎に添寝してゐるではありませんか。杏庵は、失心せんばかりに驚きましたが、やっやく、氣を落着け、そ知らぬ顔して我が家に這入りましたが、妻のお諏訪は、早くも夫れと察し

「今は何を隠しませう。妾は雲仙の諏訪の池の主で御座います。數十年前、殿様のために狩り立てられ、鐵砲傷を受け生命も危かつたのを、あなたのお祖父様に助けられました。この御恩報じをいつか致したいと心掛けて居りますと、あなた様の御病氣危篤と承り、妾を變へて御看護に参りましたのが、不思議な御縁となり、一子孝太郎を設けました。いつまでも、お側でお仕へ致したいと存じます。が姿を見破られた上は、古巢に戻らなければなりません。呉ぐれも孝太郎のことをお頼み申上げます」と忽ち、大蛇の姿に變じ、片目を自らとつて、孝太郎のお守りにして呉れと残り、雲を呼び、諏訪の池へと立去りました。

とき、寛永四年、大地にはかに鳴動し、雲仙嶽よりひと筋の大焰揚がり、日夜鳴動し、萬雷の一時に落つるが如き大音響と共に、眉山は崩壊し、土砂は海中に流れて大海嘯を起し、島原城下を洗ひ流し、親は子を、子は親を求めて、阿鼻叫喚の中に數千人の死傷者を出しました。

この時であります。杏庵一家三人は、逃げ出す間もなく家に閉ぢ込められました。近所の家がすべて押し流された中に、不思議にもたつた一軒残つて、命を失ひを致しました。これと同じ時、眉山の麓の農夫たちが、眉山の崩る音に驚いて、戸外に先を争ふて飛び出しますと、道路の真中に大きな大蛇が眞赤な舌を出して横臥つて居りますので、逃げるに逃げられず、再び家の中に閉ぢこもつた爲に、不思議に生命びろひを致しました。

人びとは、この大蛇の恩を忘れず、こゝを蛇町と名づけました。今に残る中木場通りの蛇町は、この由來からだと申します。

また、今に行はれる島原市の盆祭りに、蛇の目船と稱する精霊船が作られてゐますが、これもこの傳説に従つて、大蛇が片目を残して我が子を守つた故事に従ひ、すべて片目の船となつて居ります。

長崎縣下、至る處に、色々な傳説が残されて居ります。二百以上も御座いませう。しかし、明治以降、學術科學の進歩と共に、神祕幽冥の祕論は、學理の明鏡の下に啓かれ、妖怪變化は反つて人に脅迫され、人間を恐れるやつになりましたが、まだ、現代でも幽霊嘯や、狐狸の話が頻々と發生して居ります。私は思ふ——妖怪變化の世界は、私どもに反つて接近して來ると思ひます。

南 國 夜 想

煙草の渡來

私は煙草が好きである。いつの頃から飲みはじめたものか、ほとんど記憶にないほど遠い昔になつてゐるが、未だに煙草は私の傍から離れやうともしない。この頃、やうに、配給制度になり、一日に三本か五本とか、極めて不自由な時代にも無理に無理を重ねて一日に二三十本の煙草をふかしてゐる私である。昔のやうに、煙草の選り好みが出来なくて、どんな煙草でも口にしなければならぬのが寂しいが、そんな贅澤は、今の時勢では宥されないことであるし、毎日せめて二十本の煙草を口にする事が出来るのを有難いと思はなければなるまい。

煙草の味を語ることは、酒の味を語るよりも難しい。甘口辛口と言ふ區別を語ることも出来なければ、光と金鷲はこんな風に味がちがふなどと語ることも出来ない。煙草の味は實に淡いものである。酒の如くに飲んで陶然たる氣持になるのではなく、心靜かなとき、心嬉しきとき、悠然たる氣持で煙草を吸むところに微妙な味ひが感じられる。

煙草は、朝よし晝よし晚よし、晴れた日によし雨の日によし、明るさによし暗さによし、携帯に便で、致る處で口に出ることが出来るのが、不思議な魅力となつて私の傍から一時も離れやうとはしないのである。

こんな煙草を、世界で一番はじめに口にした人は、一體どんな氣持であつたらうか。枯葉見たいなものに火をつけて、その煙りを口に吸ひこんで見て、なんの楽しみにもなると思つたであらうか。どんな味がすると思つたであらうか。恐らく、所在なさから、氣紛れからふと口にして見たことであらう。

コンテイ、コルテイと言ふ人の喫煙年表に依ると、西曆前三千年に一種のパイプ及び香煙に依る祭典上の儀禮が起はれたのが始まりで、西曆前四百五十年頃は、スキテン族の間に、胡麻を焚いてその香煙を享樂する風が現はれ、西曆後にローマ民族の間に香煙を祭典に供へると共に、香煙を病氣の治療に用ひたことが記してある。更に、タバコに依る喫煙の風習は、西曆二百年頃より生じた説を述べてゐる。

煙草も、随分ふるくから人類の嗜好品となつてゐるやうであるが、日本人はいつ頃から煙草を口にするやうになつたであらうか。西洋よりずつと後になつて、煙草の不思議な魅力に捕はれたものゝやうであるが、その年代はあまり判然してゐない。

世界が球状をなしてゐることが發見され、コロンブスの冒險的な航海があつたりして、アメリカ大陸が發見されたり、新世界土産として様ざま珍奇なものが歐州各國に傳へられたが、その土産ものゝ一つである煙草が、傳染病のやうに非常な勢をもつてヨーロッパ全土に傳へられ、ヨーロッパからやがて日本に輸入されたものである。

元龜元年、二年と引續いて長崎を訪れた黒船から、煙草に就いての智識が先づ日本人に與へられ、

天正十年頃から多くの日本人の口に出ることが出来るやうになつた。煙草と長崎は縁の深いものである。長崎があつたればこそ、日本人は煙草の味を知るやうになつたのである。煙草専賣局もこの點を留意して、煙草の配給も長崎人には特に増配して好いやうに思はれますが、どんなものでせうか。

煙草は、秀吉が朝鮮征伐をした時に、朝鮮より渡來したものだと言ふ説があるが、やはり煙草は慶長十年、はじめて南蠻より種を傳へて長崎櫻馬場に移植すと「近代世事談」に書いてあるのが信用できる。この事は、「嬉遊笑覽」や「武江年表」や「慶長見聞集」などにも見えてゐるから間違ひのないことであらう。享保四年、長崎の人西川如見の「長崎夜話草」には、

「この草は日本の東方にあびりかといふ國あり、この國に一人の美女あり、名を淡婆姑といふ。國中の男子此女を戀したふもの甚だ多かりし。死せし後までになつかしむ人多くある時一人の男此墓に詣でしに、秋の日早く暮れにければ其儘に通夜せしに夜更けて甚飢たり。仍そのあたりを探り見れば草のかうばしきあり。一葉をとりて食ふに、飢忽ちやみ身温かに冷風肌へを犯すことなくして、淨氣を防ぐこと酒を飲むが如し、此故に南蠻草と號し、又は煙酒ともいひ、あるひは想思草ともいへり。是より世界萬國に流布す。一度此煙を吸ぬる人は是を忘れんとして忘るゝ事能はず、想思草の名最もなるかな」

と、面白い傳説が書いてあるが、煙草の傳説としては仲々面白いものである。煙草の歴史などはどうでも好い。煙草の誘惑は、私どもを氣狂ひのやうにしてゐる。どれ私も、こ

らで一服するとしようか。

オランダ人などが長崎に來ると、まづ丸山に遊ぶか出島の蘭館に彼女たちを迎へて、一夜の契を樂しんだものである。幾日も幾日も、味氣ない海上の旅を續けて來た彼等が、久しぶりに接する長崎の美しい女である。珍奇な土産ものを與へたり、南蠻料理を御馳走したりしたことは想像にかたくない。煙草もその一つであつた。言葉の通ぜぬまゝ、握手をしたり吸付煙草をしたりして愛情の發露を示した長崎の丸山の女は、日本最初の女としての煙草喫煙家であり文化の尖端人であつたと言ふことが出来る。

發 句 塚

江戸長崎と、雜談する人の口の端にも軽くかゝつた徳川時代、その頃、長崎は天領であり奉行は旗本が勤めてゐたので、江戸長崎の三百里をつなぐ道路は、長崎から言へば一之瀬街道がその第一歩である。一之瀬街道と言ふのは、螢茶屋電車終點から、國道を右に少し上る舊道である。

この街道は、長崎の關門に當るし、いろんな意味で、その當時としては非常な重要性を帯びてゐたので、その街道の入口から一三里の間、市内各町の守護神とも言ふべき石地藏がところ／＼に祭られ

てゐる。街道の一番はづれに、遠く長崎の港を見下すやうな絶景の場所二十坪ばかりの處に、馬町の地藏さんが祭られ、馬町の人は、末だに五月十五日を祭日としてこの地藏さんの前に詣で、町内の安全繁榮を祈つてゐるのである。

馬町の石地藏の左端に、山吹の繁みに囲まれながら高さ一間許りの自然石が風雅な姿を示してゐる。有名な芭蕉の發句塚である。正面の文字は、

めにかゝる雲やしばしの渡り鳥 翁

としてある。その背面には、

故さとも今はかりねの渡り鳥 落柿舎

とある。落柿舎とは、松尾芭蕉の門下で、十哲の一人、長崎出身の向井去來のことである。

向井去來の句碑として、いま一つ、薄塚と言はれる有名な發句碑が、人道としては日本一、三百五十間の長さを誇る日見トンネルの出口、左手の丘に淋しい姿を見せて風雨にさらされてゐる。

君が手もまじるなるべし花すき 去來

これは、長崎を久しぶりに訪れた去來を、日見峠まで見送りに來た長崎の卯七その他の門下に、去來が残した饞別の一句を、天明四年、去來を慕ふ人びとに依つて建てられたものである。去來は、寛永元年の秋、年五十四にして京都で歿してゐる。

吉利支丹の小唄

土地の情緒を、もつとも好く表現するものは、その土地の古い小唄である。土地の匂ひと彩りを雄辨に物語つてゐるものは小唄である。その小唄の一つ一つに、土地の古い昔が忍ばれ、唄に秘められた遠い昔の夢が、明るい現實となつて唄ふ人聞く人に深い情感を與へる。長崎は古い都だけあつて、今に傳る小唄もその數が多く、小唄の數を集めて説明を加へて行けば優に一冊の書物が出來上るほどである。

長崎の小唄の中でも、特に興味おぼえるのは、異國情緒に満ちた切支丹の小唄である。

西暦千五百六十八年、我が永祿十一年に、一艘の南蠻船が長崎の靜かな港に錨を下した。その南蠻船は貿易が目的でなく、天主教の布教を目的にしてゐた。その船で渡來した吉利支丹の伴天連は、まだ一漁村に過ぎなかつた長崎の地に上陸すると共に、熱心に、布教に努力した。それから幾年もたない天地年間には、長崎の街々には幾つもの吉利支丹寺が建てられ、アヴェ・マリアの鐘の音は、鶴の港の明け暮れに響き渡るやうになつた。

その頃、浦上家野郷には、

家野は善かよか昔からよかよ
サンタ・カララで日を暮す

(註) カラ、は、フランシスコ派の聖女であるクラ、を訛つたものである。家野は現在の長崎市家野町。もと浦上村内の一郷名で、浦上は現在でもさうだが、天主教徒の非常に多い處で、一時は、フランシスコ、シヤビエル上人の名をとつて、シヤビエル村とまで言はれてゐた。

と言ふ盆踊りの唄が流行し、つい近年まで盛んに唄はれてゐた。唄はまだ續いてゐる。

娘十四で洗禮受けて嫁ぐお家を神まもる

踊り踊つてマリアさま祈る、祈る天主の御めぐみ

盆のお神は尊きお神、サンタカラさま善く守る

月はまんまるハライソより照らす、照らすハライソ神の國

音頭とるならよか聲出しやれ、ヨハネさまで聴き惚れる

稻佐嶽に夕陽が落ちる頃、彦山に美しい月の姿が見られるころ、盆踊りの圓い輪はくるくると、男女の手振り面白く右へ右へと廻つてゆく。圓の中心から、家野はよかよか昔からよかよ、サンタカララで日を暮す——と、美しい聲が細く長く流れる。踊りの手は普通の盆踊りと大差はないが、踊る氣分は浦上の切支丹信徒のみが知る三味境であつたに違いない。

八月十三日を「善か盆」と名づけ、役人の眼を盗み、ありし日の榮光を忍びつゝ、切支丹禁制の時

代にも、この踊りは續けられ明治初年まで及んだと言ふことである。

沖に来るのはパーバの船よ

丸にやの字の帆が見える

沖に見えるはパーバの船よ

丸にやの字か書いてある

(註) パーバは羅馬法王の意。従つてパーバの船は、吉利支丹の教書を傳へる黒船を意味してゐる。丸の字は、マリヤを訛つたもので、サンタ・マリアを意味する。浦上地方の人は、未だに聖母マリアを、サンタ・マルヤさまと訛り傳へてゐるものが多い。

この唄も、やはり浦上地方の信徒に傳へられたものである。徳川時代、吉利支丹禁制の嚴しい掟を犯し、ひそかに生れ、ひそかに傳へられて來たこの唄は、なにかしら涙ぐましい心をそゝるものである。

參らうや參らうや

パライソの寺に參らうや

パライソの寺とは申すれど

廣い寺とは申すれど

狭い廣いは我が胸にあり

(註) バライツとは天國の意。バライツの寺とは切支丹寺を指す。只今の天主堂。

この小唄は、肥前平戸の生月島附近の信徒のあひだに傳へられたもので、やはり、吉利支丹禁制時代の、信徒の苦惱のにじみ出た小唄である。狭い廣いは我が胸にありと言ふあたり、強きものに對する虐げられるもの、胸一杯にある情感が力強く感ずるではないか。

昔より今に渡り來る黒船

縁が盡されば鱒の餌となる

サンタ・マリア

(註) 長崎で言ふ黒船とは、南蠻船ばかりでなく阿蘭陀船をも含む。

この唄は、信仰を唄つたと言ふよりも、自分たちに傳導するため海路はるかに異國から渡つて來る宣教師に感謝の心を述べたものである。

蘆は御棺、枕は十字架、その身は死骸、衣物は蓋にして、靈魂は天主にさづけ奉る

これは、小唄と言ふよりも、未だに長崎の信者が床に就くときに唄つてゐるお祈りの言葉である。

大天狗、大天狗、そこ立退け

この道は三品の路

御身様のお言葉を以て通らすぞ

この唄は實は面白い。天狗とは、私どもが持つ觀念と全く違ひ、吉利支丹信徒が悪魔を指して言ふ言葉である。信徒の言悪魔とは、信徒の固い密約を破つて轉宗したり、信者を密告したりする異端者を指して言ふのである。また、三品は、デウスを指して言ふ言葉で、彼等が浦上崩れの口述書の中で、天主を「デウス御三品さま」とか「御三品様」とか「御身様」などと言つてることから解る。だから、三品の道と唄ふのはデウスの路と言ふことになる。吉利支丹取締りの厭制に憫んだ彼等が、繪踏のとき、宗門改めの時、こんな小唄を心ひそかに唄つて心慰めてゐたものである。

吉利支丹の小唄は、未だ澤山残つてゐるが、只今ではあまり口にするものはない。未だに長崎の人の口端にかゝり、長崎の情緒を残りにく表してゐるものは、ぶら／＼節と濱ぶしの二つであらう。濱ぶしも、ぶら／＼節も長崎人の氣風や習慣を遺憾なく表現された面白いものである。ぶら／＼節を二、三紹介してこの稿を結ぶことにする。

ぶら／＼節

長崎名物、はた揚げ盆祭、秋はお諏訪の商宮律で、氏子がぶら／＼ぶら、ぶら／＼と云ふたもんだいちょう

(註) 長崎の三大行事、春の紙高揚、夏の精靈流し、秋の諏訪祭。これは他國に見られない特異性を持つ長

崎の名物である。

遊びに行くなら、花月か中の茶屋、梅園たいて丸山ぶらぶら、ぶらり／＼と云ふたもんだい
ちう。

(註) 丸山は長崎の花柳街、花月は古くからある料亭。梅園は神社。

紙鳶揚げするなら、金比羅、風頭、歸りは一杯機嫌で瓢箪ぶらぶら、ぶらり／＼と云ふたもの
だいちう

(註) 長崎の紙鳶あげは豊長、元和の頃から始まつたもので、他地方と違ひ、大人の遊びである。春になる
と、風頭山(四月三日)金比羅山(十日)風頭山(十五日)城の古址(二十一日)合戦場(二十五日)準提
観音(二十八日)と、長崎を取りまく山々で、紙鳶揚げ大會が、だれの主催と言ふのでもなく開催される。

今年や十三月、肥前さんの番替り、城が島見物がてらに俄羅斯がぶらぶら、ぶらり／＼と云ふ
たものだいちゆう

(註) ヲロシヤとは露西亞人。長崎は天領であつたので、鍋島とか黒田とか隣接の藩兵が守護してゐた 肥
前さまの番替りは守護交代を指して云ふ。

長崎なまりは、そんげんあんしやまたち、すらごと言ひなますなと云々たもんだいちう、言ふた
もんだいちゆう。

(註) 「そんげん」はぞんなにの意。「あんしやまたちは若い衆、「すらごと」は嘘の意。

あすこのお嫁さんは、たいそよかばつてん、ほんにあんげんしとつて横道者ばいの、おうど／＼
と云ふたもんだいちう。

(註) 「おかつさん」はお嫁さんとかお主婦さん、「よかばつてん」は善いけれど、「ほんにあんげんしとつて」
は本當にあんなにしてゐて、「横道ものばいの」は横着な奴だなあとの意。

私は、この頃の筆をとりながら、種いろと過去の思ひに胸を馳せた。未だ悪戯小僧であつた頃、お
諏訪の境内で遊んでゐて、泣き虫や弱虫を見つけると

泣きべす小べす

阿蘭陀さんの尻のごひ

クロス、マタクロス

阿蘭陀さんの尻のごひ

と、唄ひ囃した記憶が、ぼんやり浮んで來た。意味も解らず、たゞ相手を嘲笑する爲に唄つた唄で
あるが、この唄は、クロスはクロ宗、吉利支丹信徒を指し、マタクロスは外國船の船乗りを指して居
る處を見ると、泣きべすや弱虫は、吉利支丹や船乗りと同じに、阿蘭陀さんにへつらつて尻でも拭い
てやるが好い——と、多分に吉利支丹信徒を侮蔑した小唄であつた。吉利支丹信徒に反感を持つ、同
じ長崎に住む佛教徒の作になる小唄であらう。

388
UR

新聞紙局
割當事務
20.5.6
約本

割當事務
讓渡圖書

昭和二十三年一月二十日印刷
昭和二十三年一月二十五日發行

定價參拾圓(二十一圓)

長崎
昔噺集

著者 歌川龍平

發行者 長崎市馬町八三 蒲原春夫

印刷所 長崎市櫻津町七 藤木博英社

發行所 長崎市馬町八三 長崎文學社

工卜65-83

定價 ¥30.00

終